

# 川口甲遺跡発掘調査報告書

1 9 9 2

新津市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は新潟県新津市大字川口字甲344-1番地他に所在する遺跡の発掘調査報告である。遺跡名はこれまで「甲遺跡」とされて来たが、当報告の段階で、市内に同地名が多いことから「川口甲遺跡」と改名することとした。
- 2 当発掘調査は、同地内における大規模な宅地造成事業に伴う事前の調査である。
- 3 調査は新津市教育委員会が実施した確認調査結果に基づき、新津市教育委員会が行った。なお調査に係わる費用はすべて開発業者が負担した。
- 4 調査は平成3年10月2日から同11月11日までの現地調査と、引き続き11月12日から翌平成4年1月14日までの整理作業によって終了した。
- 5 発掘調査体制は次の如くである。

調査主体	新津市教育委員会教育長 川瀬敏夫
調査担当者	川上貞雄（日本考古学協会会員）
調査員	杉本恵子、佐藤友子
調査員補	田中順子
事務局	新津市教育委員会社会教育課 山口啓介、保科正旭、窪田吉衛、上沼茂、渡邊朋和、敷地一孝、阿達哲二
- 6 本書の執筆は調査員・調査補助員を中心とした検討及び協力の下で、川上が担当した。
- 7 整理作業に当り、笹神村教育委員会より笹神村郷土資料館の準備室の借用を受け、その他器材の提供を得た。また現地調査から本書作成に至るまで多くの方々の御指導・御協力を得た。紙面を借りて謝意を示す。
- 8 発掘調査参加者  
古寺花昭、神田藤吉、長谷川甲作、中野春吉、石井かね子、平川スイ子、阿部順子、宇野敬太郎、宗野ハツミ、湯田ハル、渡辺ハマ、原田昭一、上村江理子、阿部ミヨ子、風間治美、井伊令子、西郡洋子、斎藤與二郎

## 凡 例

- 1 遺物に対する挿図番号は、表番号及び図版番号と一致する。但し遺物番号ではない。
- 2 図版番号で★印の付くものは遺物番号である。
- 3 遺物の実測図のうち、須恵器・土師器共に断面は白抜きであるが文字で表示した。
- 4 土器のうち、黒色土器及び炭化物付着面の著しいものにはアミを被せて表示した。
- 5 挿図のうち第1図は確認調査の添付図を使用させて戴いた。

# 目 次

I	はじめに .....	1
1	調査に至る経過 .....	1
2	遺跡確認調査結果 .....	1
3	発掘調査と整理作業経過 .....	4
II	遺跡とその周辺 .....	6
1	遺跡の位置と環境 .....	6
2	周辺の遺跡 .....	6
3	遺跡の調査範囲と土層序列 .....	8
4	完掘地点の状況 .....	10
III	出土した遺物 .....	12
1	遺物の出土状況 .....	12
2	遺物の概要 .....	12
IV	ま と め .....	37
1	出土遺物について .....	37
2	おわりに .....	38
	参 考 文 献 .....	39

# I はじめに

## 1 調査に至る経過

当遺跡は新津市大字川口字甲地内で行われる事となった大規模開発に伴う埋蔵文化財確認調査によって発見されたものである。この確認調査の結果、開発区域の一部分、約4,000㎡に遺跡が広がっていることが判明した。そこで、この開発が宅地造成工事であることと、工事の内容は客土による埋立てが主体であり、下水道など配管工事が施行される部分のみに限って発掘調査を行うこととなりその総面積は1,065㎡に絞られた。

ここに確認調査の結果報告書があるので転載させて戴く。なお添付図等は省略した。

## 2 遺跡確認調査結果

新津市川口地区大規模開発に伴う埋蔵文化財試掘調査報告。

### (1) 調査目的

宅地造成に伴う埋蔵文化財の試掘調査を実施して、その存否を確認するとともに、遺跡の範囲・内容・性格を明らかにする。

### (2) 調査主体

新潟県新津市教育委員会（教育長 川瀬毅夫）

### (3) 調査員

担当 渡邊朋和（新津市教育委員会社会教育課主事）

### (4) 調査期間

平成3年4月15日(月)～4月17日(水)

### (5) 調査地点

① 所在地 新潟県新津市大字川口甲344の1他

② 立地 能代川左岸の自然堤防に位置し、標高約3.3mを測る。現況は水田・畑地および埋立地である。

### (6) 調査方法

2×4 m程度のトレンチを工事予定区域内に任意に設定し、バックホーで地表から地山まで徐々に掘り下げていきながら、遺構・遺物の有無を確認し、記録する。

### (7) 調査面積

調査対象面積 約50,000㎡（開発協力地・代替地等を含む）

確認調査面積 400㎡

## (8) 調査結果

### 1) 層序 (第3図)

基本層序は、上から耕作土、暗灰褐色粘土層、淡青灰色砂層、暗褐色粘土層（遺物包含層）、青灰色粘土・砂層（地山）である。遺跡周辺部では、暗褐色粘土層は腐植土層となり、河川堆積によると考えられる粘土層や砂層が厚く堆積しているトレンチが見られた。

主要遺物包含層は、暗褐色粘土層で、層厚は10～30cmを測る。地山上面からも若干の遺物が検出された。

なお、開発区域内には、掘削した後に田面より1m程埋め立てた場所が各所にあり遺跡推定範囲内の21T・32T周辺も攪乱を受けている地区がある。

### 2) 遺 構

湧水のため遺構検出作業には困難を究めたが、34Tでは、黒色の落ち込みが検出された。

### 3) 遺 物

調査範囲内の以下のトレンチから遺物が出土した。

- ・20T 須恵器6 土師器17 土錘1 羽口3 鉄滓1
- ・28T 須恵器3 土師器158 鉄滓1
- ・32T 土師器7
- ・34T 須恵器27 羽口2
- ・39T 須恵器1 土師器7

遺物は、須恵器14点、土師器216点、土錘1点、羽口5点、鉄滓2点で、総計238点である。須恵器は甕・杯、土師器は甕・鍋・椀などの破片である。須恵器杯や土師器の甕の特徴などからみて、平安時代（9～10C）に属するものと考えられる。

また、羽口や鉄滓（鏡形滓）から、集落内で精練・鍛冶段階の鉄製品生産が行われていたと考えられる。土錘は、網を用いた内水面漁業に用いられたものであろう。

## (9) ま と め

試掘調査の結果、遺跡が20Tを中心とした約4,000㎡に広がっていることが判明した。そのうち、埋立地約1,900㎡は攪乱を受けて、既に遺跡が破壊されている部分があるものと考えられる。遺跡は、開発区域外の東北方向に広がっている可能性が高い。

遺跡は、平安時代（9～10C）の集落跡としての性格を有している。当時、集落の周辺では、腐植粘土層（ガツボ層）の存在から見て、ヤチのような景観を呈していたものと考えられる。遺物包含層である暗褐色粘土層の上には砂層が堆積しており、洪水等によって集落が廃絶されたものと思われる。

今後、小字名を取って、甲遺跡とする。



### 3 発掘調査と整理作業経過

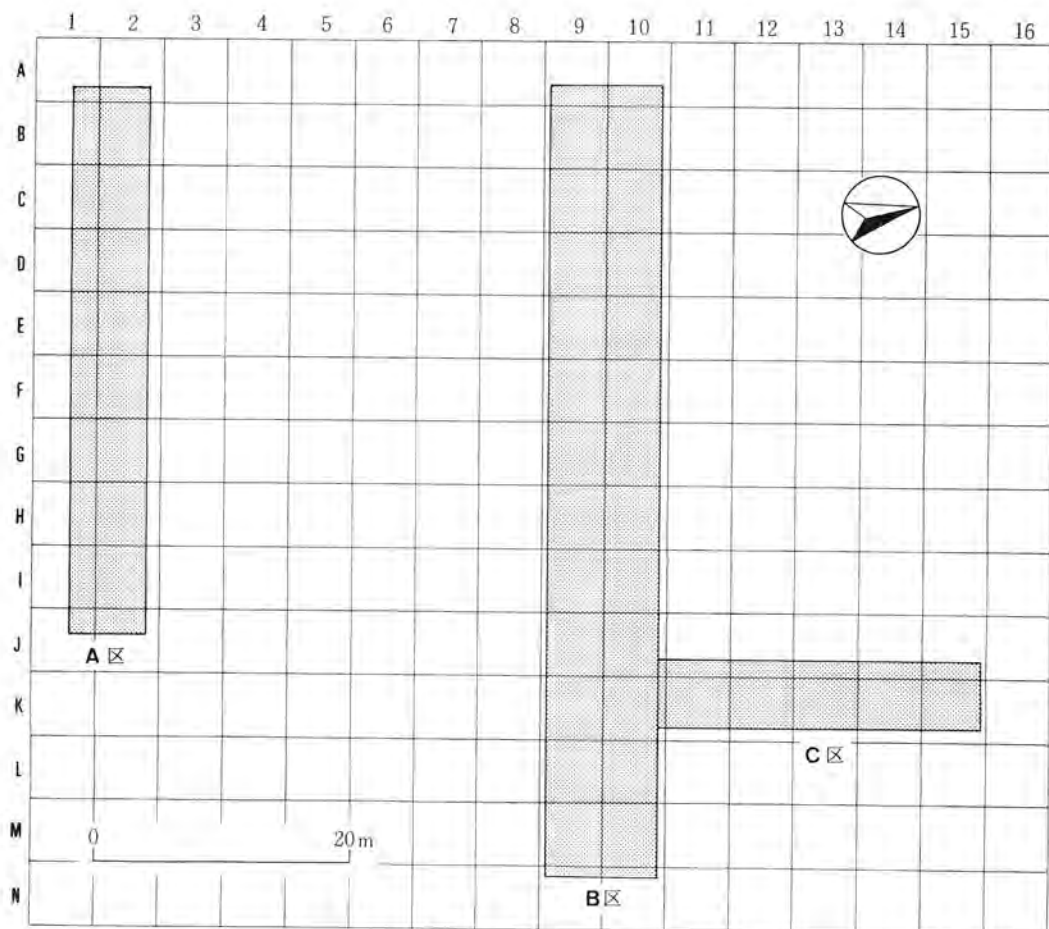
前項の確認調査の結果遺跡範囲が絞られ、開発地域の北西に位置することが判った。発掘調査の必要な範囲は、この内の道路敷予定地の一部分であり、第2図に示した南側の箇所と北側のT又はL字状の2ヶ所とがある。この内便宜上、前者をA区、後者をB区・C区と仮称することにしたが全域を5m単位の方眼をもってA・B・C……、1・2・3……と呼称することにした。(第3図参照)

これらの現況は様々で、A区は縦半分が畑地状で残る半分が厚く客土された造成地である。B区は旧農道を主体とするが、片面に側溝、他方は盛土地である。C区は広大な湿地の中であり踏み入ることの出来ない地形であった。

調査は川上等の前任の作業の終了を待って行われ、それに合わせて公道の迂回路の造設、公道の閉鎖作業に始まり、調査器材、器具の搬入を行った。排土作業はバックホーによる表土の排除と、ベルトコンベヤーで行った。C区における排水とヘドロの排除は困難をきわめた。このC区の東側は開発除外区域の水田である。従って西側・北側へ仮堤防を構築することにし、特にB区の南側は2mの深さとなり、C区はその掘削範囲が狭いことで作業行動に支障を来とし、さらに危険性も大きいことから、C区西側を出来るだけ広げ、B区と大きく接する様な範囲で排水が出来る様に



第2図 発掘位置図



第3図 グリット設定図

努めた。

調査は10月2日からの表土はぎ作業に始まり、作業員の導入は5日からであった。この秋は特別に降水日が多かったが、11月8日に現地調査を終了し、同11日に撤収した。後述することであるが、発掘区の全域がシルト質粘土層である。当然のこと人間の行動出来る大地ではなく、従って遺構等も皆無である。湧水とヘドロ化する粘土とで初めての体験を味わった。

出土した遺物、須恵器、土師器の水洗作業は現地において雨水を以ってほぼ終了していた。その後の整理作業は、市内における空室の関係などから笹神村郷土資料館の準備室を借用して行うこととなった。暖房用燃料を含む消耗品一切を搬入したが、その他はすべて同館のお世話を得た。作業は現地調査の翌日11月12日から行ったが、年内には終われず、翌年1月15日迄を要した。



## II 遺跡とその周辺

### 1 遺跡の位置と環境

新津市は新潟県のほぼ中央にあり、蒲原平野の一端を遮る新津丘陵の先端部に展開した街である。新津丘陵は南限を加茂川とし、南南西から北北東へ走るもので最高標高は高立山の276mである。これより北方に向って標高を下げ、北端の秋葉山付近では70～80mとなる。この丘陵の西側には5～15kmの低地を隔てて信濃川が流れ、市と白根市とを分つ。丘陵の東側は早出川、阿賀野川が流れ、水原町、京ヶ瀬村と分つ。さらに北側は小阿賀野に遮られ、横越村・新津市に隣接している。市域の大半は平坦な沖積平野と起伏の小さな丘陵とからなっている。

三方を大河川によって囲まれ、さらに丘陵東添に流れる能代川や丘陵より流出する大通川等の小河川等々でこの沖積平野もいわゆる低湿地帯に部類していたであろうことは容易に推測されることである。またこの沖積地内に点在する遺跡の地名に、長沼・西沼・長左衛門沼・善右衛門沼・西江浦・上浦・古津舟戸などの湖沼に関するものがある。一方親子湯と言われた山谷北遺跡や川根A遺跡に見る丸木舟出土地もあり、北潟の地名もあり水郷の様相を窺うものである。

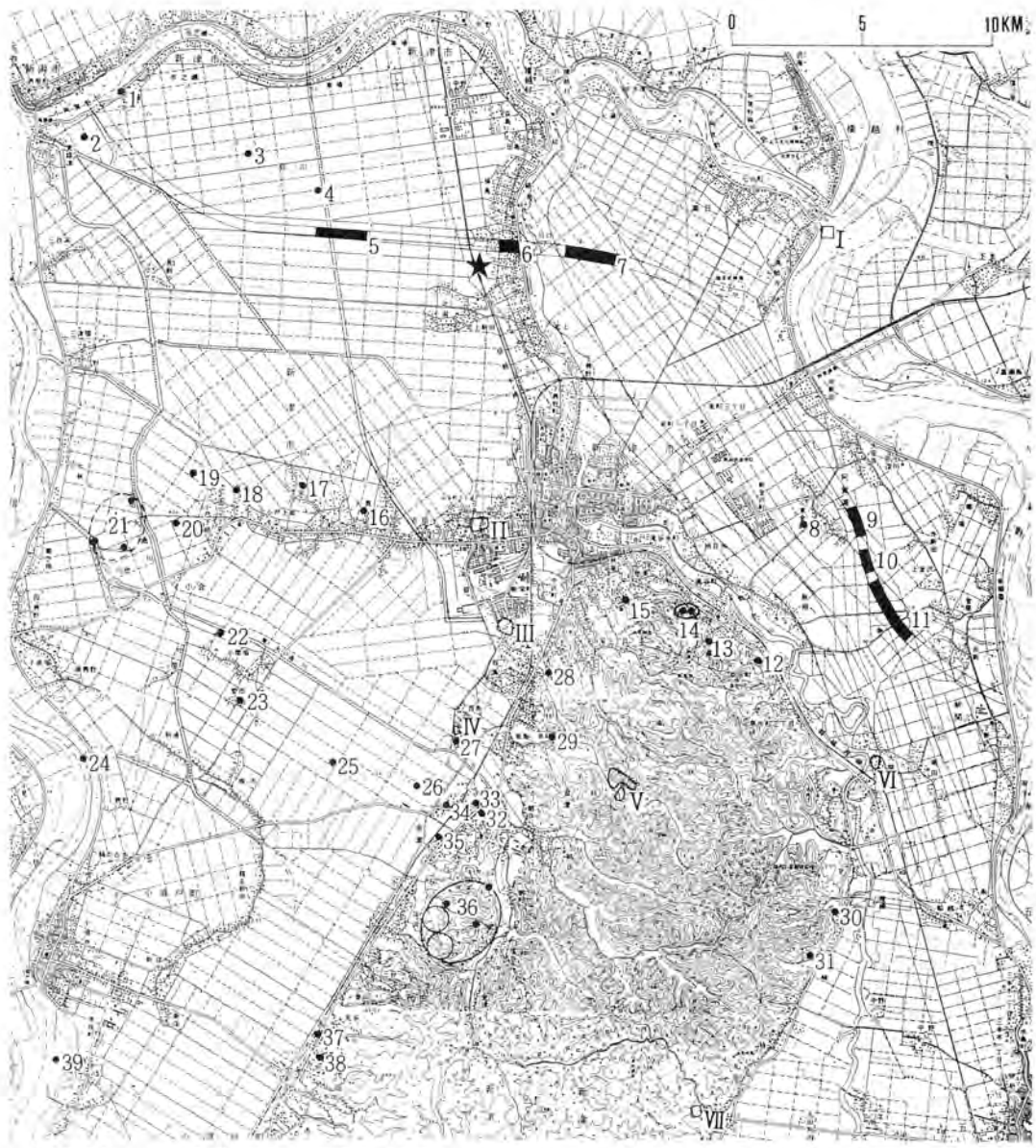
川口甲遺跡は丘陵の北端と小阿賀野川のほぼ中間地点に位置する。俗に九十九曲川と呼称される暴れ川、能代川左岸の自然堤防上に発展した現集落の川口地区西側の低地にある。第4図の★印に示した位置で川口地区の集落と信越本線とに挟まれた地点である。私共が現地を訪れた時点では前述した如く造成地荒地・沼地（荒蕪地）であったが、確認調査報告では水田・畑地・埋立地とある。この地域の現状の標高は3.9～4.3mを測るが旧水田面と思われる標高は3.3m程であり、鉄道を越えた西側に向って僅かではあるが低くなる。この様な立地の中に遺跡はある。

### 2 周辺の遺跡

新津市内における遺跡数は多いとは言われないが、面積に対する密度は大きい。近年の開発でその数は増え、今後も新たな発見が期待される。これらの遺跡を大別すると、縄文遺跡や弥生遺跡などの原始時代と、古墳時代や古代即ち、奈良時代や平安時代の遺跡、そして中世即ち、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代の歴史時代の遺跡とがある。さらに歴史時代の遺跡には単なる集落地に止どまらず、陶器類の生産を行った窯業や製鉄関連（製錬や精錬・小鍛冶）のいわゆる生産遺跡、さらに中世の城館址などに別けることが出来る。

新津市内における原始時代の遺跡で著名なものは唯一の報告書がある平遺跡の縄文集落址と、未報告だが、弥生時代の高地性環壕集落である八幡山遺跡がある。これらを含めた原始時代の遺跡のほぼ総てが丘陵地域に立地している。

川口甲遺跡は奈良時代から平安時代にかけてと考えられる歴史時代の遺跡である。従ってここで



- |        |           |            |         |           |           |         |
|--------|-----------|------------|---------|-----------|-----------|---------|
| 1 川原堀  | 8 西江浦     | 15 秋葉ブドウ園  | 22 下梅ノ本 | 29 大坪     | 36 金津製鉄址群 | III 程島館 |
| 2 下等別等 | 9 寺道上B    | 16 膳廻      | 23 曾根   | 30 下野山    | 37 九ツ塚    | IV 西島館  |
| 3 長沼   | 10 寺道上A   | 17 浄菜      | 24 浦興野  | 31 山崎築址   | 38 三沢製鉄址  | V 東島城   |
| 4 結    | 11 細池     | 18 小戸下組    | 25 中郷   | 32 古津諏訪社前 | 39 横川浜外   | VI 大間館  |
| 5 上浦   | 12 草水家址   | 19 西沼      | 26 北郷   | 33 古津駅前   |           | VII 丸田城 |
| 6 江内   | 13 滝谷家址   | 20 長左衛門沼   | 27 桜大門  | 34 古津舟戸   | I 長崎城     |         |
| 7 沖の羽  | 14 七本松築址群 | 21 川根A・B・C | 28 城見山  | 35 二百刈    | II 新津城    | ★ 川口甲遺跡 |

第4図 周辺の遺跡分布図

は歴史時代の遺跡について記述することとし、第4図に示した遺跡分布図には原始時代の遺跡は示されていない。

ここに示した遺跡の内、28城見山は縄文時代と古墳時代或いは古代との複合遺跡である。32古津諏訪社前遺跡、35二百刈遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての遺跡とも考えられる。これら3遺

跡は丘陵地に立地している。

川口甲遺跡とはほぼ同時代と推定されている遺跡は多く、1・3～5・7～11・18～24・25～27・29・30・33・34が古代の集落址である。これらの大部分は低湿地に立地するが、沖積地内の自然堤防上に位置するものと考えている。なお30下野山遺跡は土取りが行われた後地より須恵器片が発見されたもので、位置的に見て或いは窯址の可能性もある。

2下等別当遺跡、6江内遺跡、16腰廻遺跡、17浄落遺跡は中世の遺跡である。この内遺跡の性格が確実なものは江内遺跡のみで、名称の如く集落址である。その他は不明であるが、腰廻遺跡からは瓦搏様の遺物が見られることなどから祭祀遺跡の可能性が強い。

37九ツ塚は古代の塚であり、きわめて稀な遺構が報告されている。

12草水窯址、13滝谷窯址、14七本松窯址群、31山崎窯址は須恵器を生産した窯址群である。いずれも8～9世紀のものと推定され、この内七本松1号窯が発掘調査され報告されており、阿賀野川西南地域における著名な遺跡である。

36金津製鉄址群、38三沢製鉄址、39横川浜堤外地遺跡はいうまでもなく製鉄関連遺跡である。横川浜堤外地遺跡から鉍滓が検出されているが、遺跡の性格は不明である。金津製鉄址群は広範囲に及ぶ遺跡であり、ここでは、古代及び中世における製錬（製鉄）と精錬が行われたことが解る。その他、24浦興野遺跡などでも鉍滓が検出され、また当川口甲遺跡でも羽口（炉の送風管の先端）が検出され平地の集落内での野鍛冶的な生産が行われていたことが知られている。

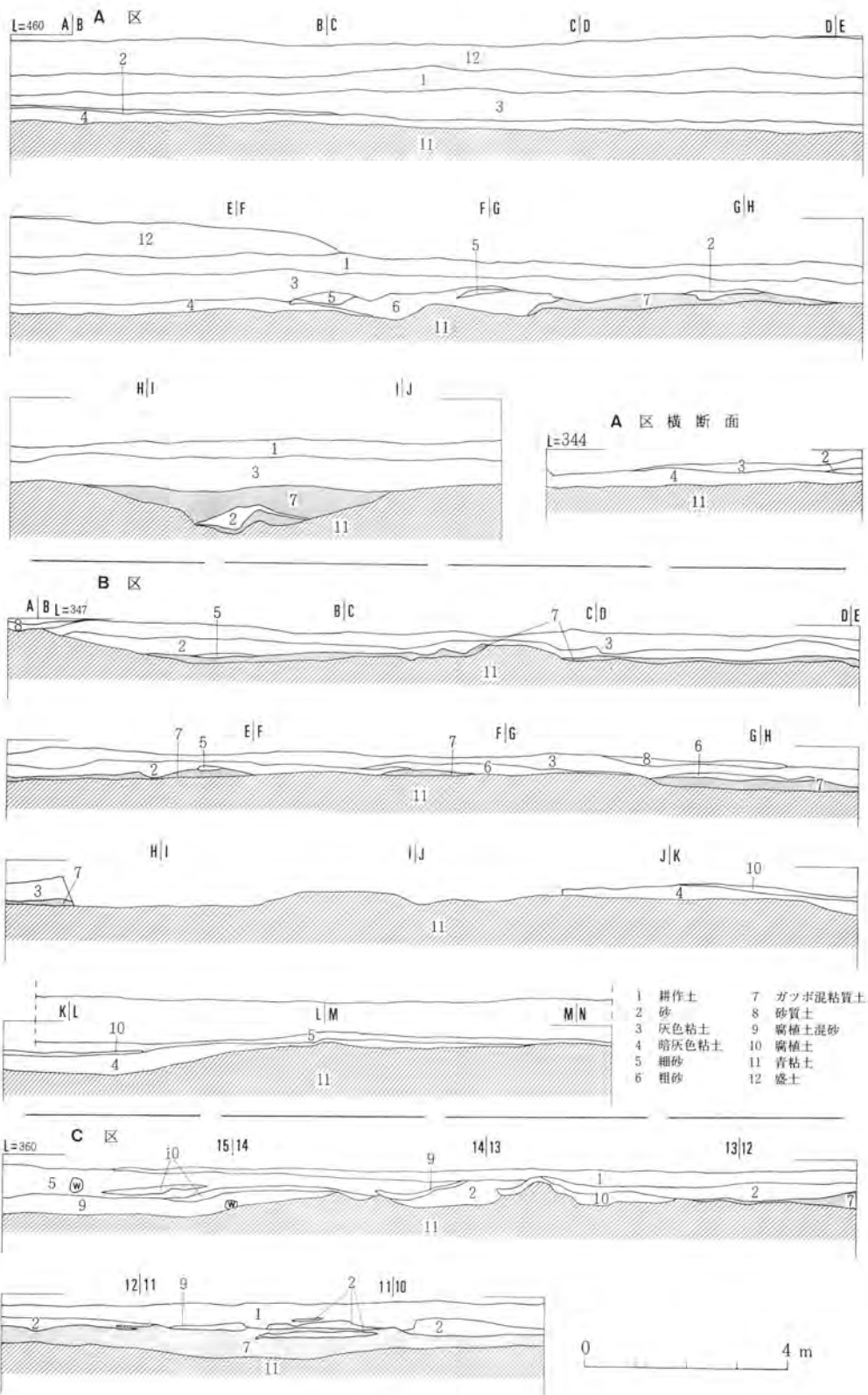
川口甲遺跡はこの様な環境の下に営まれた。

### 3 遺跡の調査範囲と土層序列

前章に記述した如く調査範囲はごく限られたもので、A、B、Cの3区がある。開発計画図によれば、A区は6の11号道路で幅員6mであり、その内43mの258m<sup>2</sup>、B区は9-13号道路で幅員9m、調査範囲は63mであるが深さの関係上、掘削できた幅員は4～7m幅であり、面積は402m<sup>2</sup>であった。C区は6-13号道路で幅員6m、調査範囲は25mであるが開発除外地に接しているため掘削出来た幅は4.7m程であった。いまA・B・C区に仮称したが、第3図に示した如く5mグリッドを組んで、これらにアルファベットと数字を以って表示した。

調査区域における土層は各所によってバラツキが見られ、その多くは不安定である。それらの一部を第5図に示した。

A区の縦断面図は北側の壁面であり、横断面はB-C間で上層部分を排除した残りの土層である。A～F区にかけて厚い客土がある。下層部もA～F区間は一大部分に薄い砂層を見るがほぼ安定している。F～J区間は5細砂、6粗砂、7ガツボ混粘質土等の土層が入り乱れ、地山面も凹凸が多く複雑である。A区及びJ区における地山面はほぼ水平である。横断面に見る地山は南側が低い。A区に於ける遺物包含層は、4暗灰色粘土層、6粗砂層、7ガツボ混粘質土層であるが、A～C区間における暗灰色粘土層には遺物が含まれていない。



第5図 遺跡土層図

B区の断面図は北側の壁である。上部は攪乱されていて旧表土は見られない。特にH-J区間は沼状地点のため背後の地山の一部も消失している。全体に不安定で地山の凹凸も多い。遺物包含層はA区と同様の地層であるが、総てに含まれているものではない。ここでの出土はD-M区間の4・6・7であり、A-C区間にはほとんど含まれていない。

C区における土層はより複雑である。窪地などによるもので地山の起伏が特に激しい。また表土の下は砂を中心とするもので、9腐植土混砂層、10腐植土層が挟まる。またWで示した倒木類も多く目立った。遺物は9腐植土混砂層より検出され、従って14・15区に集中した。

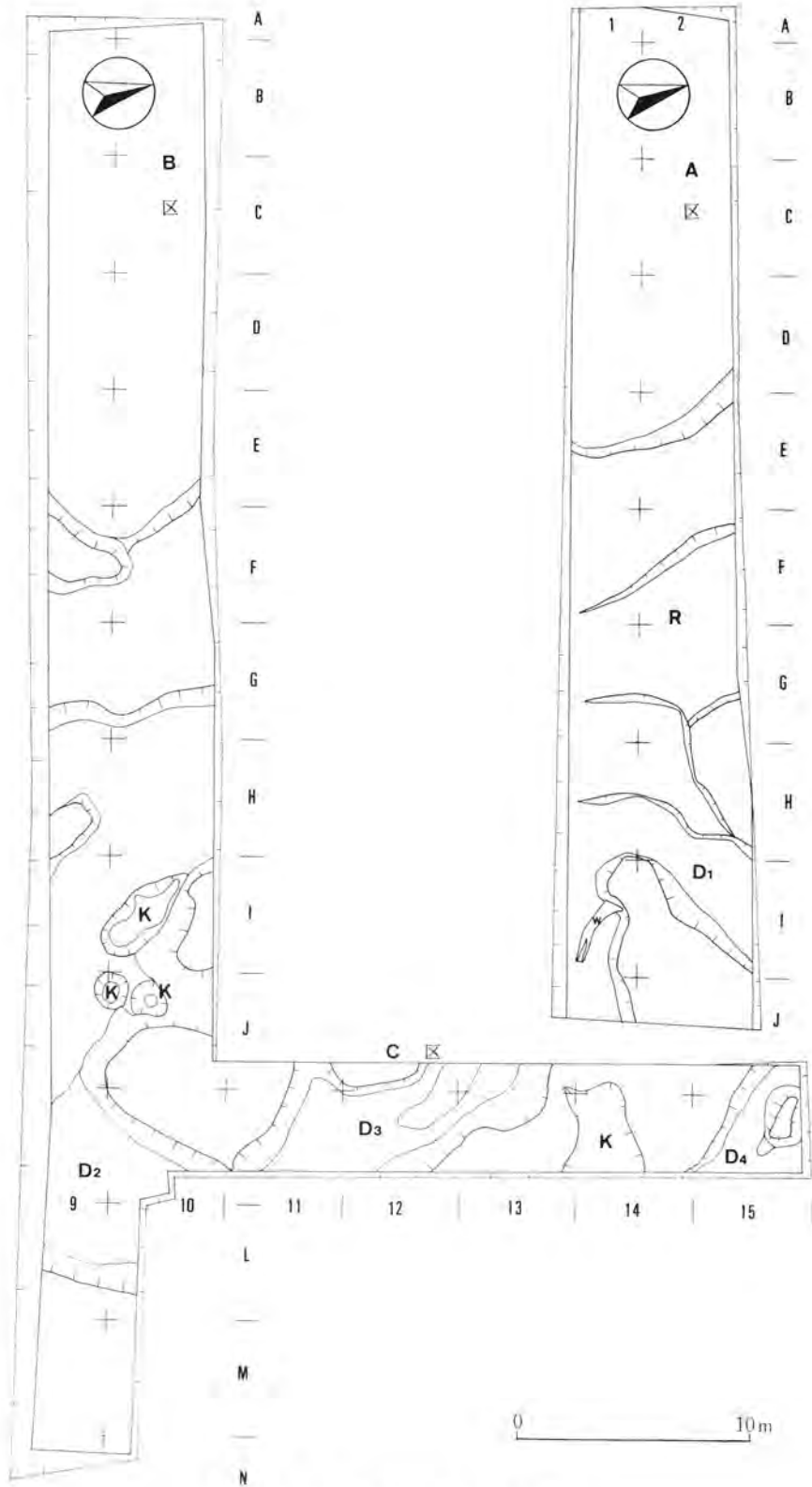
#### 4 完掘地点の状況 (第6図参照)

発掘調査の結果、多数の出土遺物を検出したが、人為的な遺構を見ることは出来ず、すべて天然の窪地、河川状のものである。

A区ではA-D間は全く平坦地である。Rに示したものは南北に延びる砂層であり浅い川状のものと考えられるが、後述するD<sub>1</sub>の窪地より新しい時期のものと考えられる。D<sub>1</sub>は1-2よりJ-1に向って屈折する溝状のものである。北側が急に深さを増していることから河川とは考えられない。この幅は上部で4.2m、底部は3m程でややV字状を呈する。深さは最大で70cmを測る。

B区もA-E間は平坦である。D<sub>2</sub>は上幅7m、底部幅5.5m程で、南側から北側へ向って徐々に深くなり、60cm程を測る。これを覆う土質は暗灰色粘土で他の溝状の窪みのガツボを主体とする粘質土とは異なっている。Kは円形・楕円形の小型な窪みであり、深さは20cmと浅い。

C区におけるD<sub>3</sub>は幅4~5m、底部幅4~5mの溝状の窪みで、西側に向って深くなる。その西側で65m、東側は30cmの深さを測る。覆土はガツボを主体とする粘土である。位置的にD<sub>2</sub>と接続する如く見えるが、深さや土質の上で異なることが分る。D<sub>4</sub>の全容は不明だが30~40cmの溝状を成す。砂を主体とする覆土に被われているもので他とはその成立が異なるものであろう。Kは10~15cmの窪みである。



第6图 発掘調査区域全測図

### III 出土した遺物

#### 1 遺物の出土状況

発掘調査区域内に遺構が検出されないことから、出土した遺物はいわゆる遺物包含層より検出されたものである。その出土状況はそれぞれの区域、地層等によって異なり、散発的、或いは集中的と様々である。遺物包含層については前章の土層序列にも記述したが、ここでは平面的な状況を記録しておきたい。

A区において遺物が集中して検出されたのはRからD<sub>1</sub>にかけての砂層を中心にした区域である。この砂層はガツボ混粘土を主とするD<sub>1</sub>に流れ込むが、この接点に遺物が多い。その他C・D列の暗灰色粘土層で単発的な検出を見た。なおE及びJ列の高所での検出は見ない。

B区においては量的には少ないが、H～J列の暗灰色粘土層に集中した。またD<sub>2</sub>底部にも集中した。西側の平坦部分にはごく少量が単発的に検出された。M・N列での検出は見られない。

C区では14列の比較的高所の砂層に集中したがD<sub>1</sub>の深い砂層では少ない。一方11列の暗灰色粘土層でも目立った。D<sub>3</sub>のガツボ混り層内には見られない。

#### 2 遺物の概要

出土遺物は須恵器、土師器、土製品、木製遺物、自然遺物の他、時代を異なる土器・陶器がある。これらの主たるものを実測図・一覧表及び写真図版とで示した。ここでは補足的に記す。なお縮尺関係や紙面の都合上器種割等に統一を欠いた。

##### (1) 須 恵 器

壺類(第7・8図、図版9) 形態が明らかなものは短頸壺のみでありその他の口縁部分を見ない。短頸壺は1・2・17があり3もその可能性が高い。1は破片数6点からほぼ全容を知ることが出来る唯一のもので、肩の張った器高の低い形態である。やや内側向きの頸部外面に自然釉がかかる。蓋の当り部分に釉の剥離帯が見られ、焼成時点における癒着が考えられる。高台の外面への張り出しは特異である。2・3は残存率は12/1.5程の細片である。17は頸部に強みがないが自然釉がかかるものである。第9図31は壺蓋である。撮部分を欠失した細片であるがこれら短頸壺の蓋である。肩に丸味を持つ赤褐色の器で唯一の出土である。

12・18～30は形態は不詳だが広口壺と推定されるものである。12は丸底器形の底部に近い部分である。内外共条線状叩き文があり外面は工具によるヨコナデがある。18・19は内外面の施文を示したが、外面は条線状の叩き文が主体である。内面には同様の叩き文と、当具痕があり、また双方の併用されたものがある。当具痕には幾種類かが見られ、18・19は八本骨の源氏車をあしらった同心円文、22は直径4cmの同心円文、25・27は青海波文である。23・26・27が叩き文と青海波文の当具

が併用されている。

瓶類 (第7・8図、図版9) 5～11は横瓶である。いずれも細片である。5の頸部立上りは外開きで、口唇部が強くおさえられている。6の頸部はやや厚く、口唇部はより強くおさえられている。7は頸部の接合点で、大きな剝離痕を残す。瓶の前面の部分に当り肩部の径は小さい。8・9の外面及び内面の拓影は紙面の都合もあって省いたが、双方共ロクロヨコナデ仕上げである。11はいうまでもなく側壁部分である。

13～16は長頸壺である。このうち13・14の小型器と15・16の大型器とがある。13は頸部の上半分で全長ではない。肉厚で直立したもので口元を大きく外側へ広げ端部をつまみ上げている。器面は焦茶色で光沢がある。14は肩部、胴部接点が最大径を有して曲折する。また器肉の厚さも異にする。肩部には砂目が多く着く。15は外開きの頸部であるが口径9cmに対し長さは4.5cmと低い。口唇部を外側へ強く引き出しておさええており、肉薄で荒いロクロ痕を残す。16はやや外反ぎみのものであるが口元を欠いている。

坏蓋 (第9図、図版10) 32～47がある。図版10に示した如く全体を知ることの出来るものも多いが、これらの直径が13～15cmで、後述する坏類の直径は12～13cmを主としている。それぞれの器形の特徴は様々で、器壁の肉厚・肉薄、肩部の角張るものと丸味のあるもの、器端部の折り返し方、撮の形態の相違などがある。これらの内、特に撮の形態で頂部が凹状のものから徐々に盛り上げるものの順で32～38と並べた。また46は器端の反り返しを見ないもので稀なものである。坏蓋の表面はその製法上におけるヘラ痕があざやかに残るものが多い。なお37の肩部の膨らみは気泡の膨張によるものである。一方転用硯(硯に転用されたもの)の33・36・38がある。図版10に示した如く裏面に墨が残る。なお42～44の裏面に墨痕が僅かに残る。硯に転用された可能性が大きい。

坏類 (第9～11図、図版11～14) 唯一の有台坏(高台坏)122の他はすべて無台坏であり、その個体数は約242点と多量である。その内48～121の73点を図示した。坏蓋同様に様々の形態、特徴を見ることが出来る。口径の最小は58の11cm、最大は95の14cmであり12cm台のものが態勢をしめる。成形はロクロによる水挽きと籠起しと呼ばれる籠による切り離し痕を残しているものがすべてであり、二次調整として切り離し後の籠痕をナデによって消したものも見られる。なお使用ロクロは右回転・左回転の双方がある。器形の特徴には底部に丸味をもって立上る48～52などと、その他の角張るものがあり、一部104・109の如く底部が浮き上り特に著しいものがある。器壁の立上りについては全体に傾斜が大きく、従って底径に対して口径の割合合いが大きい。さらにその細部については外反ぎみに立上る85・90、ほぼ直線状の104・109、やや内湾する103などがあり、部分的に器端部に変化をもたせた86・89の受口状のものなどがある。形態上やや特異なものに95・115がある。いずれも器高が4.5cm程と大きなもので、特に95は底径に対する口径の比率が200%と大きい。

その他数点に墨書が見られる。48は側面に「大」さらに底部に細い「十」の刻文がある。49も側面に「大」カ、50は底部に「主」カ、101の墨痕、105の底部は「栗田」「西水田」「西木田」等と見えるが判断し兼ねる。116の底部は「大」の字である。一方68は器内口縁部にススが付着し、外面口縁部も黒色化している灯明皿に転用されたものである。



122は唯一の有台坏である。底部から腰部にかけての細片であるが、高台部分と立上り部分の距離から坏と判断出来るものである。低い高台とその角度など特徴が見られる。

**碗類** (第11図、図版14) 大小の碗がある。全体の個体数は17点程で少ない。123～127は小型のものである。全形を知るものは2点のみである。低くて大きな高台と、口元近くでやや内湾する特徴がある。ロクロ水挽きで甕起しの一部にはさらに底部の甕ナデによる調整が見られ、高台が接着されるものである。126の高台内に「申」の墨書がある。

大型の碗は128～137であり最大口径は130の15cmを測る。成形では小碗と変りではなく底部の甕起し・甕調整が見られ、129の腰部にも甕調整痕がある。器壁の立上りにはあまり変化を持たないが、130の外向、133のやや内湾ぎみのものなどがある。高台はいうまでもなく付高台で低く、内向きのものが多い。128はやや形態を異にしている。

## (2) 土 師 器

**甕 A 類** (第12・13図、図版15) 器形の全容を見るものはないが、165の胴長の器形に159の丸い底部を備えた形態、即ち胴長で丸底を呈すものを A 類とした。器高、口径等は大中小があるが、基本的な形態は口縁部に最大径を測る165等と、胴部に最大径を持つと考えられる138等とがある。いずれにせよ、胴部の立上りは頸部で大きく外反し口縁部を造り出している。口縁部や口唇部の造りは様々で、頸部で折り曲げ、僅かに口唇部をおさえただけの138・139から、口唇部を外面から強くおさえた140・141などや、さらには再度上方へ引き上げた146～149・159・160などと変化を見る。さらに165・169の如く口唇部を肉厚に造り出したものなどもある。形態の上で145はやや奇異なものであるが、歪みによる実測結果と考えている。

器に施された二次的調整は、ロクロ回転における横位の刷毛目あるいはヨコナデと条線状の叩き文による器表面と、同様の刷毛目あるいはヨコナデと条線文の他、櫛目と同心円文又は青海波文の当具痕などによって施されている。これらの調整は器の上部と下部とに2分されて施され、165に見られる様に肩から胴部下までが内外面共に刷毛目あるいはヨコナデ技法により、腰部より底部にかけては外面の叩きに対し内部の当具痕が見られる。ここでは上部の細片が多く上下の施文関係を明白には出来ないが、これが通常の調整である。なお175～185は叩き文と当具痕とを示した。当具の紋様には前記の同心円文、青海波文の外花文(花卉文)を有する175・184がある。

**甕 B 類** (第14図、図版16～18) 平底を呈する一連のものを一括した。器形は全体的に見て小型のものも多く薄造りの特色を有する。A 類に比較してやや胴膨れの形態を見るが、口径に最大径を見るものもある。また A 類の胴長に対し、器高と最大径とが同比率に近いものである。なお198は非常に大型で、また他の一連のものとの製法も異なるものであるがここに加え置いた。

成形に当ってはやや膨みを持たせた胴部から頸部で紋り込み、大きく外反させ、さらに器端部をやや内側に折り曲げている。ロクロ切り離しは回転糸切りと静止糸切りの二通りによる。多くの器が一息の水挽きのままだが、二次的調整の加えられたものとして191～194の刷毛目とナデが見られ、197・198は腰部における縦位の甕調整が見られる。186～207は回転糸切痕を底部に見る。但し199は周りが剥離しているため不明瞭であるが静止糸切りの可能性がある。208～212は細片のものもある

るが静止糸切痕を有し、この種の器種においては稀なものであろう。

一方内外面にスス・炭化物の付着するものが多い。

塀 (第15・16図、図版19) 図示したものに全形を有するものはないが、口径に最大径を有し、丸底の器であり、現代のボール状を呈する。口径は40cm前後、器高は15cm前後である。基本形態は丸底の底部から外開きに立上り、口縁部をさらに外側へ折る。この曲折の大小や、さらに口唇部における上方への折返しの有無などは様々だが、器端部に厚みを持たせる特徴がある。口縁部、口唇部における個々の特徴は図示した通りである。二次的調整ではロクロによる櫛目・刷毛目・ナデが器の内外面に見られ、腰部から底部にかけては外面の条線状叩き文、内面の櫛目の外、青海波文を有する当具痕とがある (243~256参照)。さらに篋削りに依るものも見られ、228の頸部下部分の調整、244・252の腰部は面取状の削りが見られる。

なお特異なものとして229・232などがある。前者の口縁部は一旦内側へ折り曲げたものを外反させており、後者の口縁部は非常に薄く成形されている。

またスス・炭化物の付着を見る器が多い。

坏 (第17図、図版20) 器の大小、手法の相違などで分類することが出来るが一括した。257~259は大型に部類するもので、唯一その口径を知ることの出来る257は17cmを測るものである。3点共薄い繊細な造りで器面にロクロ痕を残し、底部のロクロ切り離しは総て回転糸切りである。二次的調整として器の内外面がミガキ上げられている。

260も大型に部類し、成形も前者と同様であるが、焼成法に異なりを見、内面が黒色処理された、いわゆる内黒土器である。なお表面は風化しているがミガキが加えられている。

261~287は口径13cm前後の普通サイズの坏である。製法に関しては大型坏と同様で、大きく外に向ってのびる器壁が、中程でやや内湾する。腰の下部を強くおさえられ、従って底部の輪郭が明瞭なものが多い。底部のロクロ切り離しは回転糸切によるが、267は静止糸切である。磨耗が進み採掘出来ない。全体に薄手のものが多いが肉厚のものも見られる。特に286は肉厚で別種のものかも知れない。

二次的調整には器の内外面をミガキ上げたものが多くある。その他272は回転糸切痕を擦り消しており、287は内面が漆膜に被われている (図版22)。漆を塗られたものか、或いは漆の容器とされたものかは化学的調査に依らねばならない。

その他、墨書されたものがある。269は底部に「大」の文字があり、265には墨痕が残る。

### (3) その他の遺物

土錘 (第18図、図版23) 288~293で小型の土錘である。太さ1~1.3cm、長さ2.5~4cm程で細い孔が貫通する管状のものであり、焼成は硬質であるが土師質である。魚網のおもりである。この内4点が同一地点の出土であり、同一の網に使用されたものであろう。

石錘 (第18図、図版23) 295は拳大の自然石の両端を打ち欠いたもので石錘と考えられる。紐を掛けて使用するもので縄文時代にその起源を見る。一応この時代のものとしておきたい。材質は風化が進んだ半花崗岩である。

羽口（第18図、図版23） 296・297の2点があり、特に後者は細片である。羽口とは製鉄炉や鍛冶の火床に使用する送風管の先端である。296は先端部直径4cm、胴部直径6cm程で、内径は2.5cmである。長さは6.5cmの断片である。羽口本体の焼成度は弱いが二次的な被熱で先端部はガラス質となり、その後部2cm程は海綿状の気泡がある。その背後は硬質に変化している。297は先端部の細片で復元図も推測の域を出ない。鉄滓の付着によって羽口と判明することが分る。

鋳滓 図版23-N 13に示した鋳滓がある。化学的分析を見なければ内容は不明である。

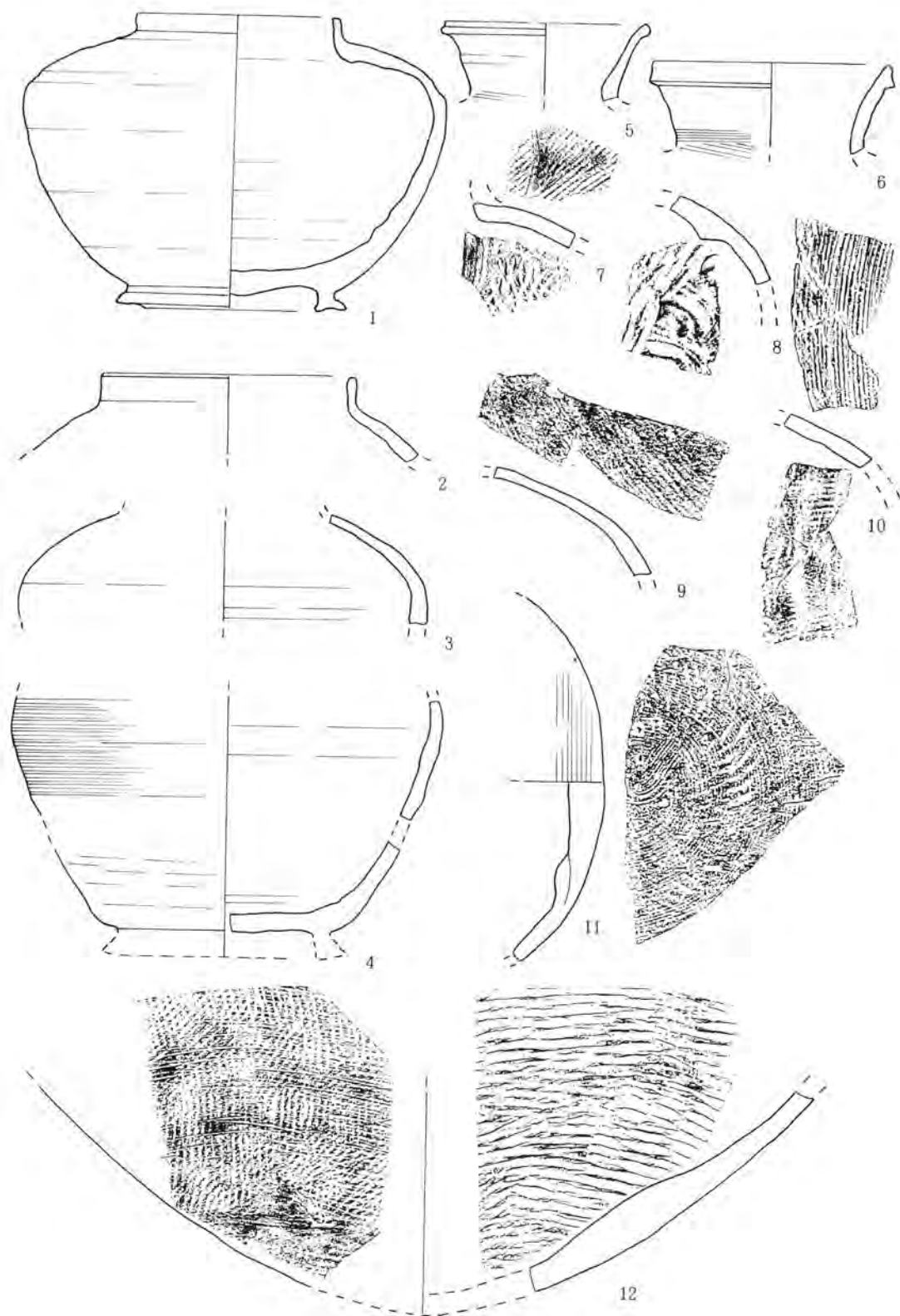
凝固物（図版23） 数cm大の凝固物3点がある。黒色を呈し表面はややなめらかである。不明の物体である。

土板（第18図、図版23） 294は約1/2の残欠品だが、直径4cm・厚さ0.6cmの円形の土板で、中央に孔を穿つ土師質の土製品である。用途などは不明である。

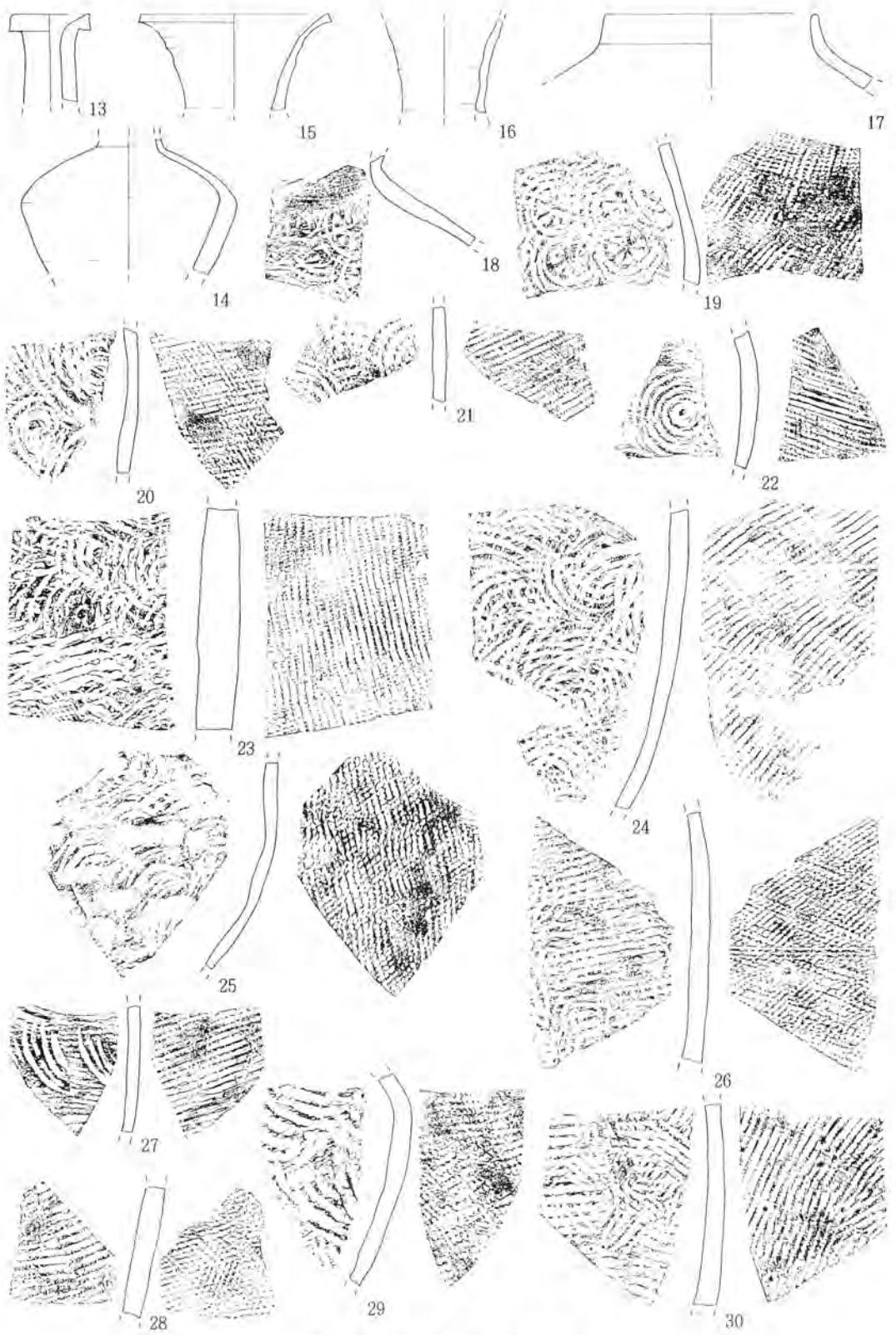
木製遺物（第19図、図版23） 板、杭類である。3・4は板状、6は割材、その他は杭と推定出来る。板・割材は杉、杭の内1・2はイタヤ、5・7は栗、8は杉を材料としている。

自然遺物（図版23） 種子類である。エゴノ木の種子89個の内に外皮を被るもの1個がある。出土地点にエゴノ木と推定される大木が横たわっていた（図版5-中参照）。その他トチの木の内果皮、オニグルミの果実がある。

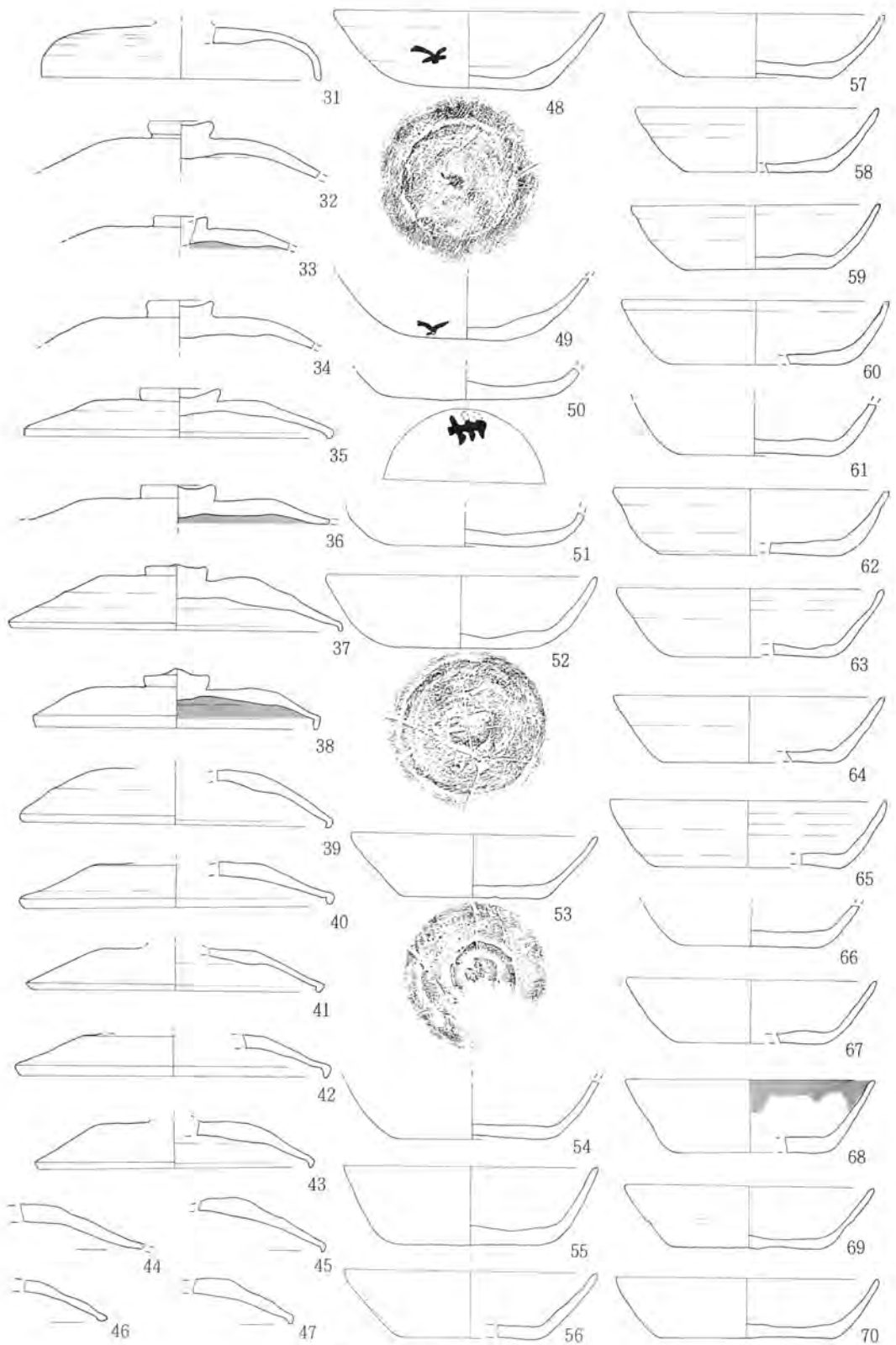
時代を異にする遺物（第20図） 298～301は同一個体のもので、弥生土器の破片である。外向きに開く口縁とやや胴張り形態から深鉢であろう。内外共に刷毛目を有する粗製の土器である。302は高坏の脚部である。焼成は良好であるが時期は不明である。303・304は中世須恵器系陶器である。前者は描目を見ないが鉢、後者は壺片である。いずれも細片であるが、中世初頭のもので、北越後における北沢窯の製品であろう。



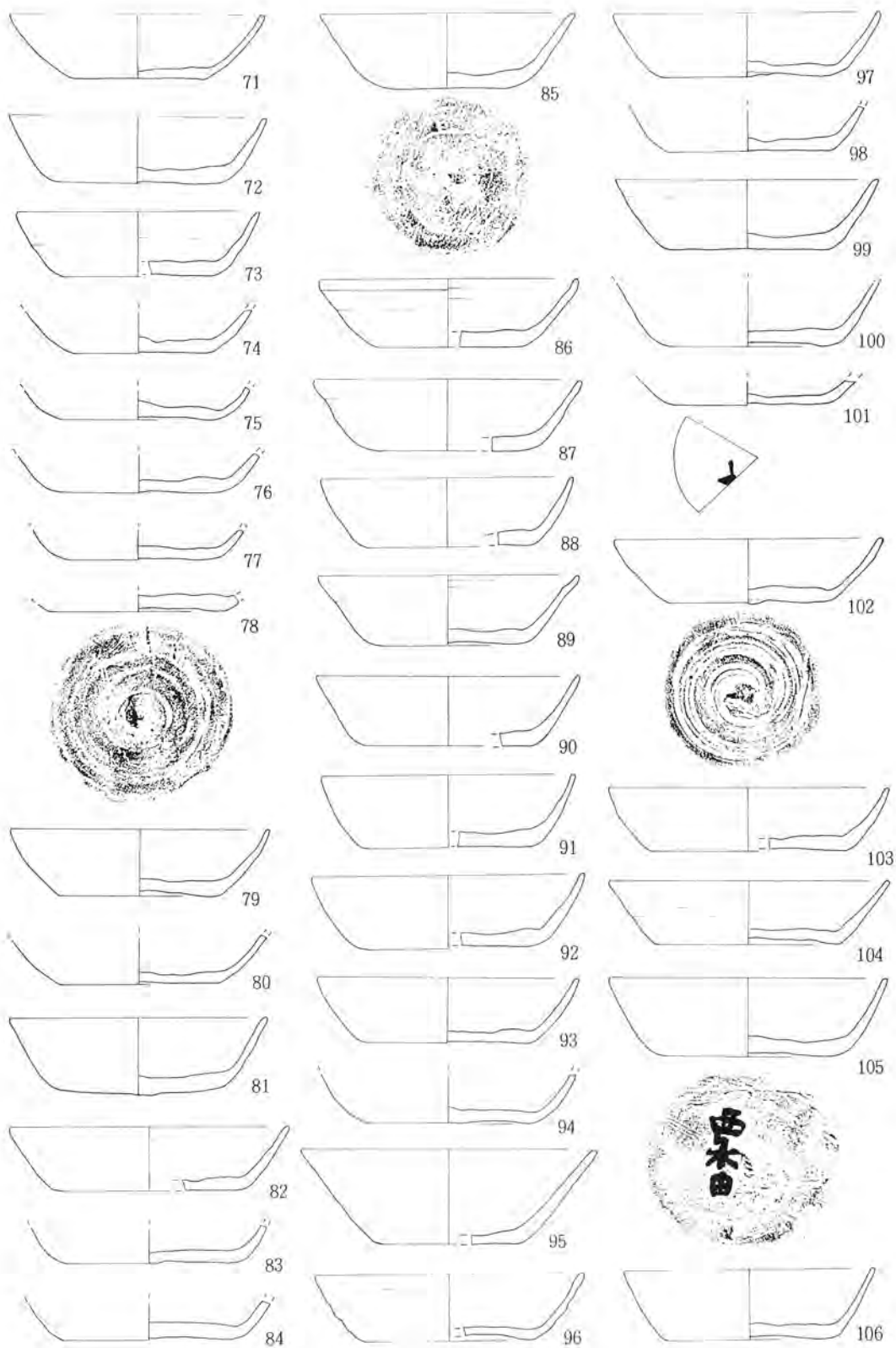
第7図 須恵器、壺、瓶類 (1/3)



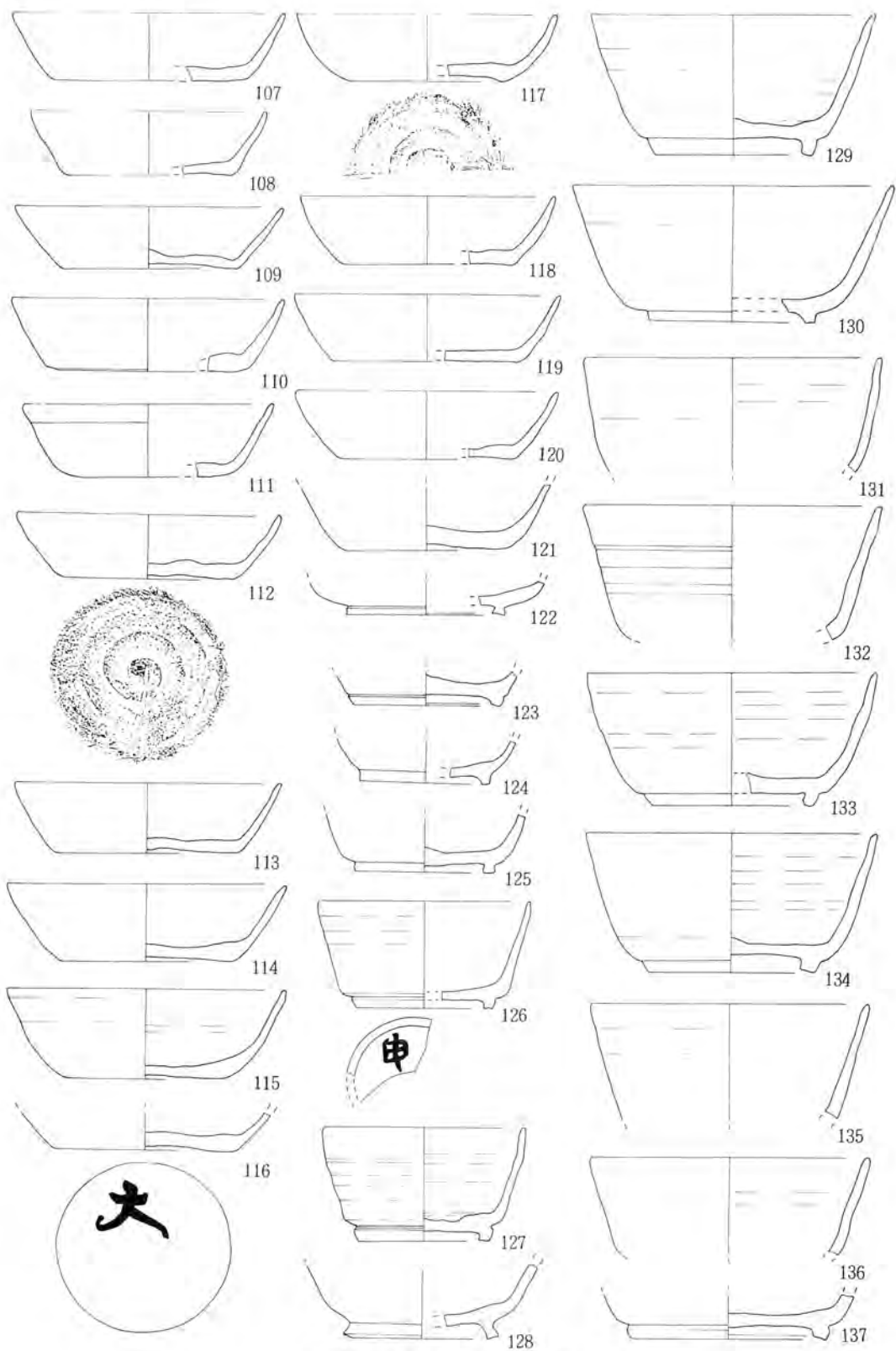
第8圖 須惠器、壺、瓶類 (1/3)



第9圖 須惠器、蓋、坏 (1/3)

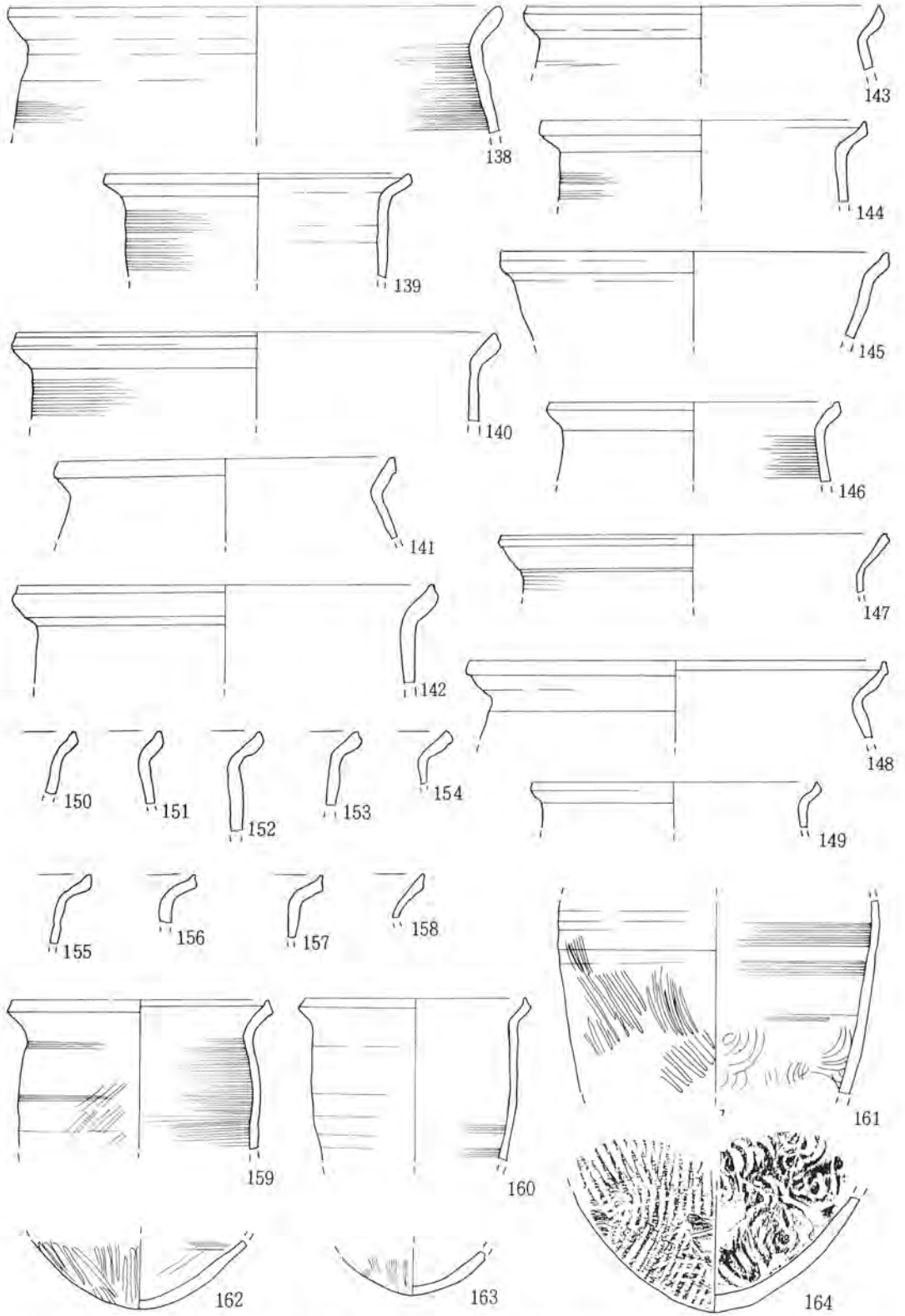


第10図 須恵器、坏 (1/3)

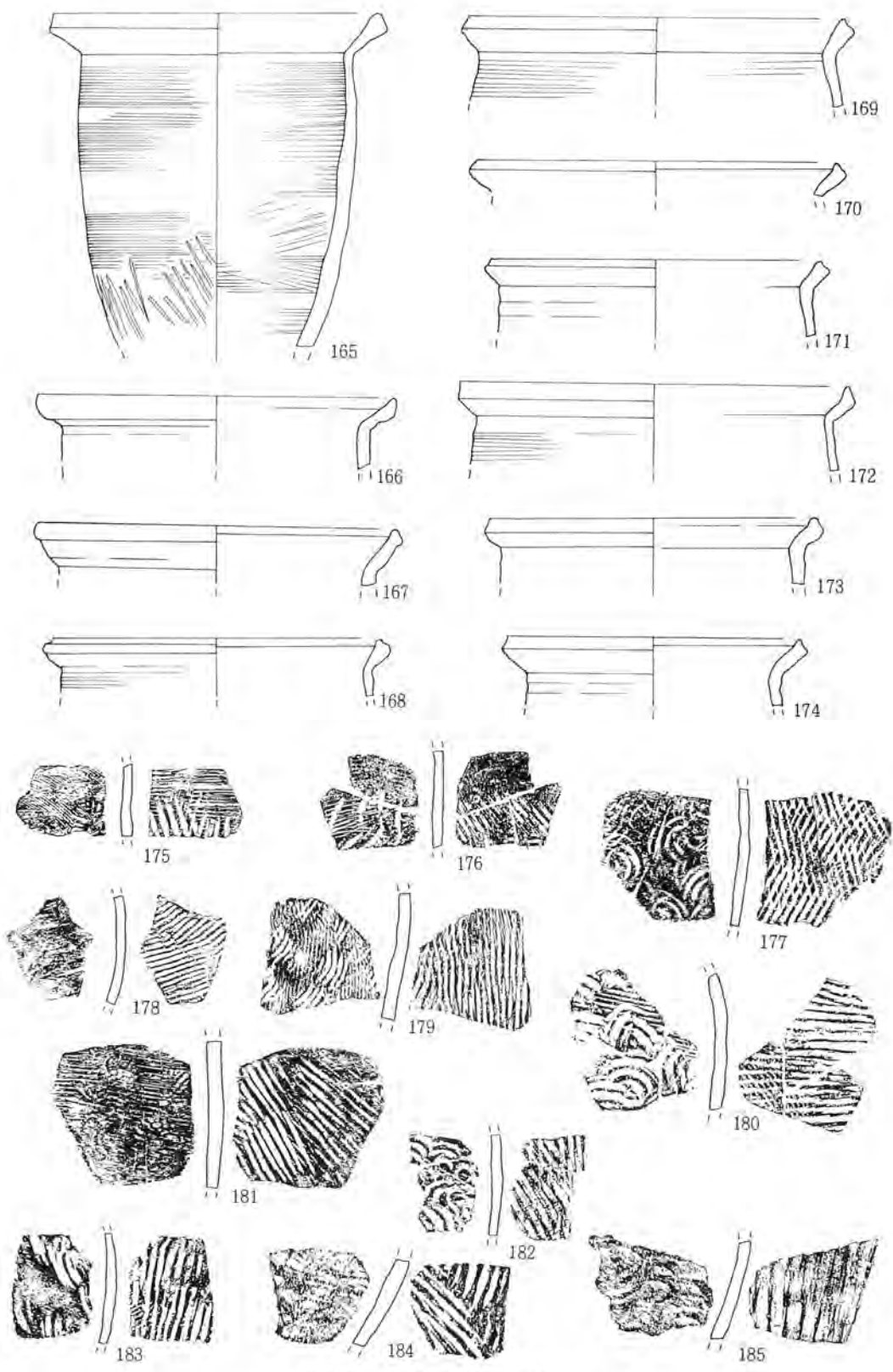


第11图 須惠器、坏、碗 (1/3)

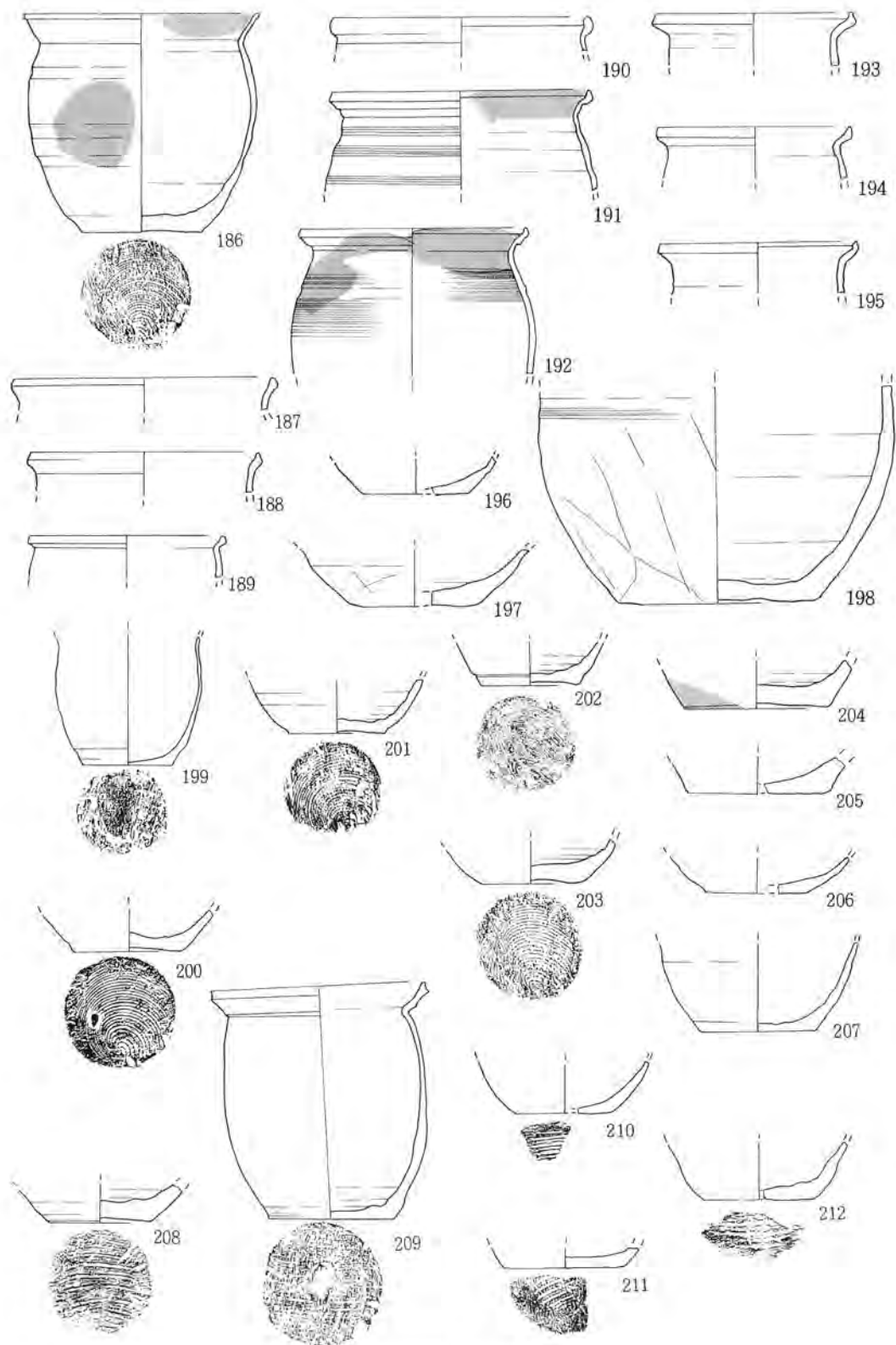




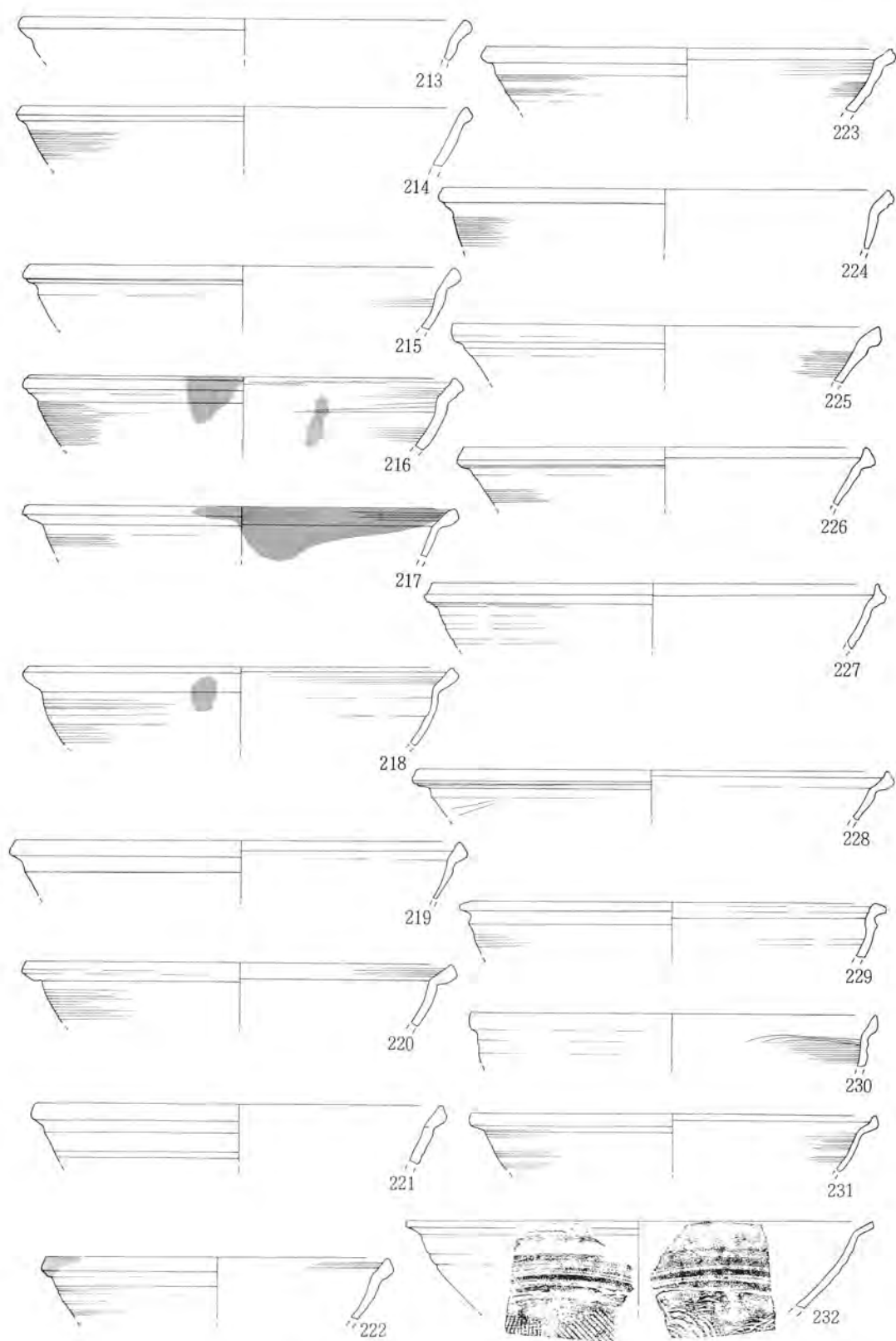
第12図 土師器、カメ A 類 (1/4)



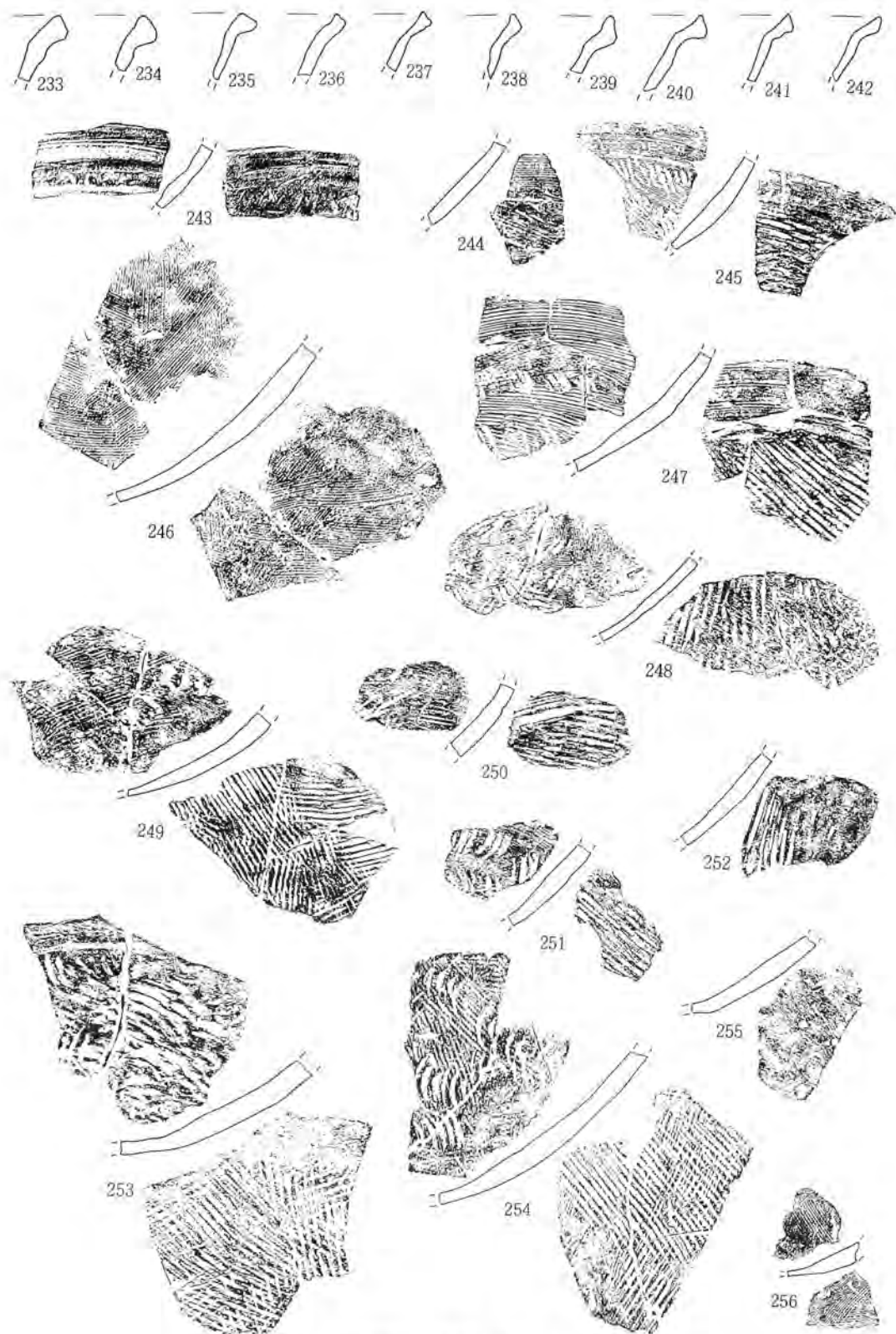
第13図 土師器、カメ A 類 (1/4)



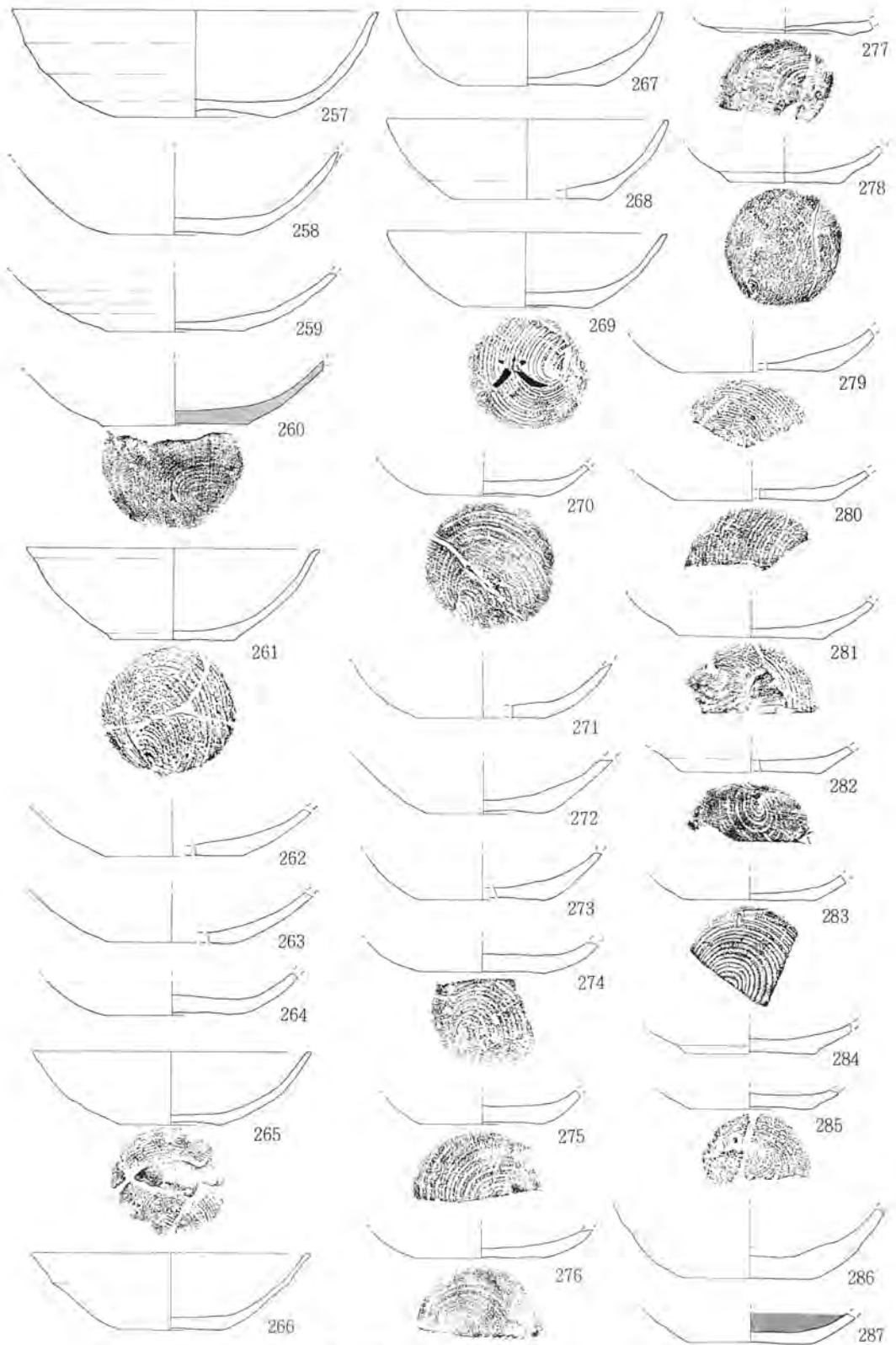
第14図 土師器、カメB類 (1/4)



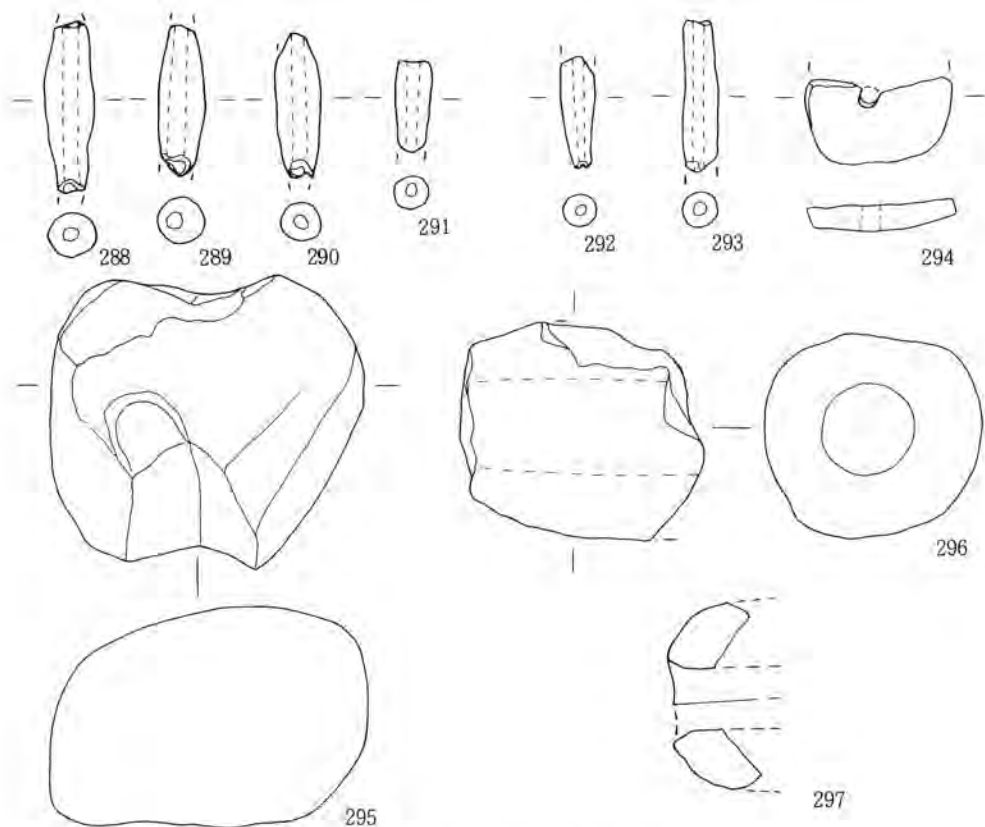
第15図 土師器、埴 (1/6)



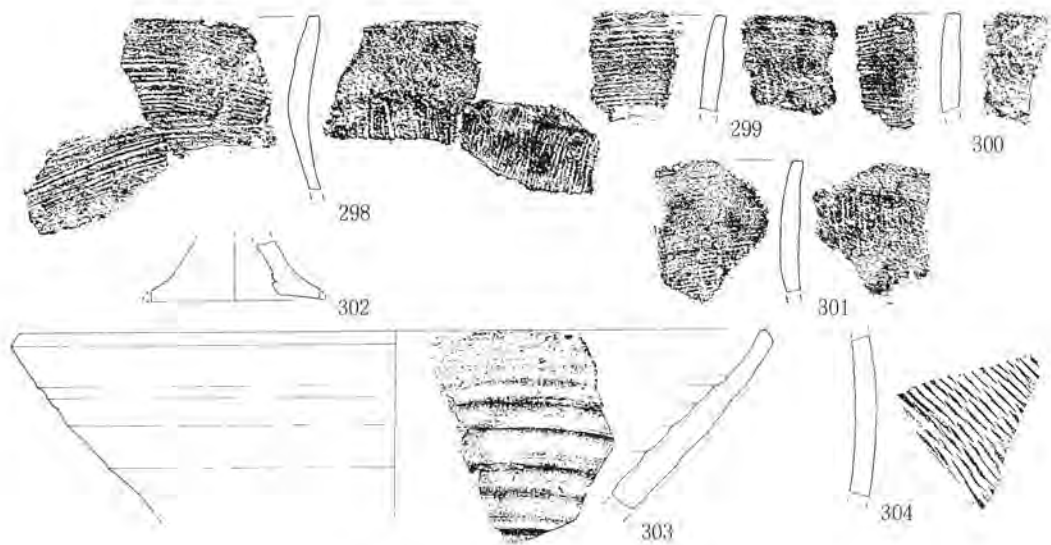
第16圖 土師器、埴 (1/4)



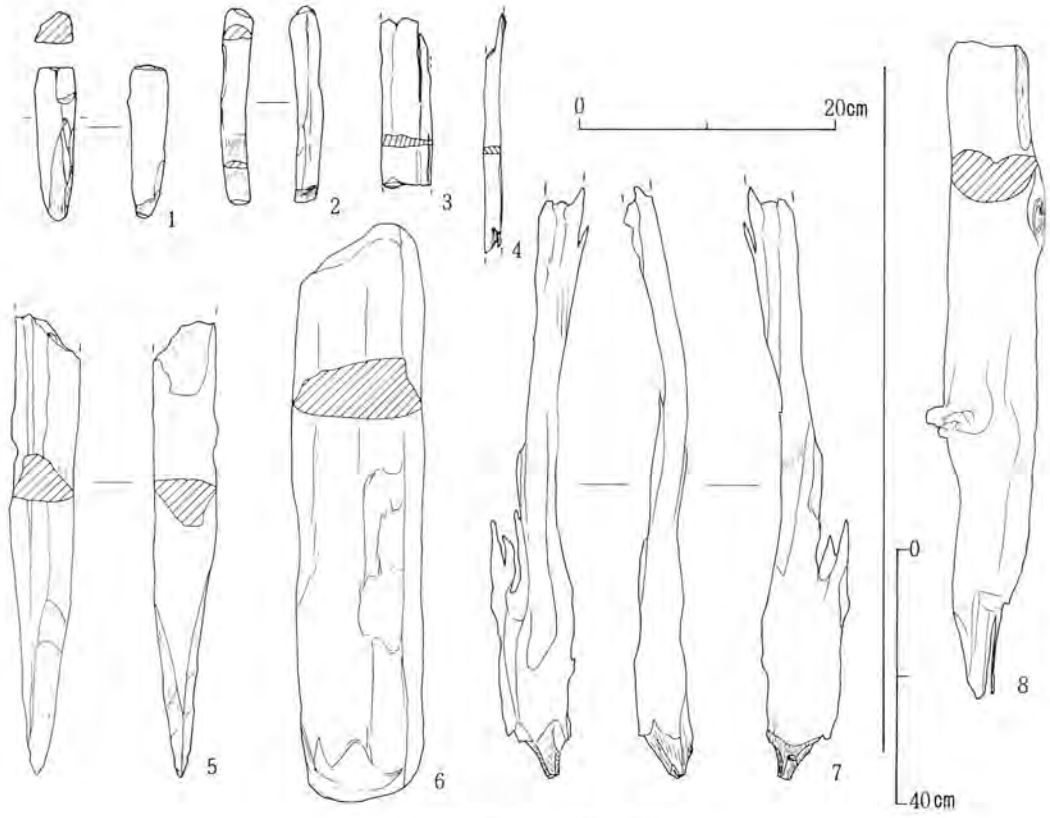
第17圖 土師器、坏 (1/3)



第18図 土錘、羽口、その他 (1/2)



第19図 弥生土器、中世陶器 (1/3)



第20図 木製品 (1/6、1/12)



須 惠 器 一 覧 表

挿図 No	遺物 No	出土場所	器 種	計 測 (mm)				残存率 0/12	製 法	胎 上	焼 成	備 考
				器高	口径	底径	最大径					
1	412	B-L-9 B-J-10	壺	140	96	108	200	7		石英微粒	良	短頸壺
2	413	A-F-1	〃		120			1.5		石英、黒雲母微粒	良	〃
3	414	B-I-10	〃				190	1.5		〃	良	
4	416	B-L-9 B-L-10	〃		(110)		203	3		石英粗粒多		
5	405	A-J-2	瓶		95			2		石英粗粒少	良	横瓶
6	406	C-J-12	〃		110			2		〃		〃
7	411	A-F-2	〃							石英、黒雲母微粒	良	〃
8	408	A-F-2 A-G-2	〃							石英細粒	不	〃
9	409	B-K-10 C-J-14	〃							石英粗粒、黒雲母	良	〃
10	408	A-F-2 A-G-2	〃							石英細粒	不	〃
11	407	B-I-10	〃							石英粗粒多	良	〃
12	439	A-D-2	壺						タタキ 青海波	石英微粒	〃	底部
13	402	C-K-11	瓶		30			12		石英細粒	良	小型長頸瓶
14	401	A-H-1	〃				100	4		石英微粒	良	〃
15	404	A-C-2	〃		90			2.5		石英微粒少々	不	長頸瓶
16	403	A-G-2	〃					3		〃	〃	〃
17	415	A-F-2	壺		100			2		石英、黒雲母微粒	良	短頸壺
18	425	B-E-9	〃						カゴメ、同心円	石英微粒多	〃	薄手 } 同一個体カ
19	426	〃	〃						〃	〃	〃	
20	428	A-G-2	〃						〃 青海波	石英細粒	〃	
21	430	C-J-13	〃						タタキ、	石英、黒雲母微粒	〃	
22	429	A-G-2	〃						カゴメ、同心円	長石、石英微粒	〃	
23	435	A-F-2	〃						〃 タタキ	石英、細粒	〃	
24	433	B-L-9 B-J-10	〃						〃 青海波	長石、細粒	〃	
25	434	A-H-2	〃						〃	石英細粒	〃	
26	437	B-E-9	〃						カゴメ、タタキ、同心円	長石、黒雲母微粒	良	
27	432	A-H-2	〃						タタキ、青海波	密	〃	
28	438	A-D-1	〃						カゴメ、タタキ	長石、黒雲母微粒	〃	
29	431	A-F-1	〃						〃 青海波	石英微粒	〃	
30	436	A-I-2	〃						〃 タタキ	〃 少	〃	
31	217	A-F-1 A-F-2	壺 蓋		140			3		〃	〃	
32	204	C-J-14	坏 蓋		(140)			7		石英細粒	〃	
33	209	B-H-10	〃					3		密	〃	転用硯
34	206	B-J-10	〃					4		石英細粒	〃	
35	201	A-D-2 A-C-2	〃	23	144			7		〃	〃	
36	205	A-C-2	〃		(150)			6		密	〃	転用硯
37	203	A-D-2 A-H-2	〃	31	150			4		〃	〃	
38	202	B-K-10	〃	28	130			4		石英細粒	〃	転用硯
39	207	A-D-2	〃		140			4		石英微粒	〃	
40	210	A-F-2	〃		146			2		密	〃	
41	208	A-F-2	〃		148			2		石英細粒	〃	
42	212	B-H-10	〃		144			1		〃	〃	墨付着
43	211	A-F-2	〃		130			2		密	〃	〃
44	216	A-F-2	〃					1		〃	〃	〃
45	214	A-E-1	〃					1		〃	〃	
46	215	A-F-2	〃					1		石英細粒	〃	
47	213	C-K-15	〃					1		〃	〃	転用硯
48	1	B-A-2	坏	35	126	65		9		石英粗粒	良	腰部に(大)の墨書、 底部に(十)の刻文

挿入 No	遺物 No	出土場所	器種	計測 (mm)				残存率 0/12	製法	胎土	焼成	備考
				器高	口径	底径	最大径					
49	17	A-H-1	坏			50		3	ヘラおこし	石英粗粒	不	腰部に墨書(大)カ
50	18	B-H-10	〃			80		2	〃	密	〃	底部に墨書(主)カ
51	79	B-H-10	〃			76		2	〃	〃	良	付着物あり
52	2	A-H-1	〃	34	128	68		9		石英細粒	〃	
53	44	A-E-2	〃	30	116	64		8		〃	〃	
54	74	B-G-10	〃			70		4	ヘラおこし	〃	不	殆んど焼けてない
55	4	B-J-10	〃	37	120	70		8		〃	〃	〃
56	23	B-J-10	〃	32	120	64		4	ヘラおこし	〃	良	
57	32	A-H-1	〃	30	120	76		6		長石粗粒	〃	腰部付着物
58	15	A-H-2	〃	30	110	60		4	ヘラおこし	密	不	
59	24	A-H-1	〃	30	116	68		4	〃	石英、長石微粒	良	
60	19	A-D-2	〃	30	124	80		3	〃	密	〃	
61	73	A-H-1	〃			70		2	〃	〃	〃	
62	25	A-I-2	〃	32	128	86		5	〃	〃	〃	霰み
63	22	A-C-1	〃	32	124	78		2	〃	〃	〃	
64	20	A-G-1	〃	32	126	80		3	〃	〃	〃	
65	21	A-H-1	〃	32	128	86		2	〃	〃	不	
66	70	A-F-2	〃			70		3	〃	〃	〃	
67	16	A-H-2	〃	30	116	70		3	〃	〃	良	
68	35	B-J-10	〃	34	116	70		4	〃	〃	〃	灯明皿転用
69	36	A-F-2	〃	29	116	70		4	〃	〃	〃	
70	52	A-H-1	〃	29	122	80		11	〃	石英微粒	〃	
71	27	A-H-2	〃	30	118	62		4	〃	〃	〃	腰、底部に付着物
72	26	A-E-2	〃	31	120	78		5	〃	石英細粒	〃	
73	10	A-H-2	〃	30	112	70		4	〃	〃	〃	
74	59	A-F-2	〃			60		4	〃	密	〃	
75	62	A-H-1	〃			72		3	〃	石英微粒	〃	
76	77	A-C-2	〃			70		2	〃	密	不	
77	61	A-G-2	〃			66		4	〃	〃	〃	底部に刻線1本
78	83	A-D-2	〃			80		3	〃	〃	良	
79	48	A-B-2	〃	31	120	76		6	〃	〃	〃	
80	66	A-D-2	〃			74		4	〃	石英細粒	〃	
81	5	B-J-10	〃	35	120	80		7		密	不	
82	29	A-I-2	〃	30	130	88		4	ヘラおこし	〃	良	
83	75	A-G-2	〃			80		2	〃	〃	不	
84	60	B-H-10 B-J-10	〃			80		4	〃	長石細粒	良	
85	3	A-D-2	〃	34	120	60		8	〃	石英粗粒	〃	
86	13	A-J-2 A-I-2	〃	32	122	70		3	〃	密	〃	
87	11	A-H-10	〃	33	126	72		4	〃	石英、長石微粒	〃	
88	58	A-H-2	〃	32	119	76		3	〃	密	〃	
89	9	A-H-1 A-H-2	〃	32	122	68		4	〃	〃	〃	
90	54	A-D-2	〃	33	124	78		4	〃	長石細粒	〃	
91	33	A-H-2	〃	34	120	80		3	〃	密	不	
92	31	A-H-2	〃	35	128	78		3	〃	〃	良	底部に刻線2本
93	42	A-C-2	〃	31	122	78		6	〃	石英粗粒	〃	
94	72	A-H-2	〃			80		3	〃	石英細粒	〃	
95	37	C-J-14	〃	45	140	70		1.5	〃	〃	〃	内部スス付着
96	28	A-H-1	〃	32	128	80		4	〃	〃	〃	
97	43	A-I-2	〃	30	124	8		8	〃	密	〃	
98	67	A-H-2	〃			78		3	〃	長石細粒	〃	
99	8	A-C-2	〃	32	124	75		6	〃	密	不	
100	63	C-J-15	〃			80		3	〃	石英細粒	良	
101	86	A-D-2	〃			70		1	〃	密	〃	墨痕
102	51	A-H-2	〃	30	124	78		10	〃	石英細粒	〃	

挿図 No	遺物 No	出土場所	器 種	計 測 (mm)				残存率 0/12	製 法	胎 土	焼 成	備 考
				器高	口径	底径	最大径					
103	41	A-1-2	坏	30	130	90		4	ヘラおこし	密	良	
104	39	A-H-2	〃	30	130	80		8	〃	〃	不	
105	45	B-H-10	〃	37	130	78		10	〃	〃	〃	黒書(西水田)カ(栗田)カ
106	50	A-H-1 A-H-2	〃	33	116	76		6	〃	石英微粒	良	
107	12	A-D-2	〃	32	126	82		4	〃	密	〃	
108	30	A-H-1	〃	30	120	76		4	〃	〃	〃	箱み
109	40	B-J-10	〃	29	126	80		5	〃	〃	不	
110	55	A-H-2	〃	33	128	84		3	〃	石英細粒	良	
111	14	A-E-1	〃	34	116	68		3	〃	石英微粒	〃	
112	46	A-H-2	〃	30	124	78		10	〃	石英粗粒	〃	
113	49	B-F-10	〃	33	126	84		4	〃	石英細粒	不	
114	47	A-1-2	〃	36	130	80		6	〃	密	良	
115	6	B-E-9	〃	42	130	74		5	〃	〃	不	
116	85	A-B-1	〃			82		5	〃	長石微粒	〃	黒書(大)
117	7	B-J-10	〃	32	123	70		5	〃	密	良	
118	56	B-K-10	〃	32	120	80		2	〃	石英微粒	〃	
119	34	A-F-2	〃	32	126	86		3	〃	密	不	
120	57	A-D-2	〃	32	124	80		3	〃	石英微粒	良	
121	87	34トレンチ	〃			76		6	〃	石英細粒	〃	
122	312	B-H-10	有台坏			75		2	〃	密	〃	
123	318	20トレンチ	碗			70		2	〃	〃	〃	
124	311	A-H-2	〃			62		2.5	〃	〃	〃	
125	310	A-H-2	〃			66		5	〃	長石微粒	〃	
126	307	A-D-2	小 碗	50	100	64		2.5	〃	密	良	
127	306	A-H-2	〃	54	94	62		3.5	〃	長石微粒	不	
128	309	A-F-2	〃			74		5	〃	〃	良	
129	302	A-C-2	碗	66	132	72		2	〃	〃	〃	
130	304	A-H-1	〃	64	150	78		2	〃	〃	不	
131	315	A-1-2	〃		138			1.5	〃	長石、石英微粒	良	
132	305	B-E-10 B-F-10	〃		140			3	〃	長石微粒	〃	
133	303	C-J-13	〃	62	135	75		3	〃	〃	〃	
134	301	A-B-2	〃	66	136	76		6	〃	石英微粒	〃	
135	313	A-C-2	〃		130			1.5	〃	〃	〃	
136	314	A-F-2	〃		130			2	〃	長石微粒	不	
137	308	A-G-2	〃			88		4	〃	密	良	

土 師 器 一 覧 表

挿図 No	遺物 No	出土場所	器 種	計 測 (mm)				残存率 0/12	製 法	胎 土	焼 成	備 考
				器高	口径	底径	最大径					
138	1528	B-J-10	カメ A		310			1	ハケメ、ハケメ	石英細粒	不	
139	1520	A-D-2	〃		190			1	〃 ナデ	石英粗粒		
140	1529	B-H-10	〃		300			1	〃 〃	石英細粒	不	
141	1501	A-D-2	〃		210			1	ヨコナデ	〃	〃	
142	1508	A-G-1	〃		260			1	〃	石英粗粒		
143	1521	C-J-14	〃		220			1	ハケメ、ナデ	〃		
144	1518	A-H-1	〃		200			1	〃	石英、黒雲母細粒		
145	1532	B-J-10	〃		240			3.5	ヨコナデ	砂粒少		
146	1506	B-J-10	〃		180			1.5	ナデ、ハケメ	石英粗粒	良	
147	1576	A-D-2	〃			66			ハケメ	石英細粒	〃	
148	1523	A-D-2	〃		260			2	ヨコナデ	石英粗粒、黒雲母		
149	1554	A	〃		180			1	木挽	〃 多		
150	1514	B-K-10	〃		260			1	〃	石英細粒、雲母少	不	
151	1516	A-H-2	〃		180			1	ハケメ、ナデ	石英細粒多		

挿入 No	遺物 No	出土場所	器 種	計 測 (mm)				残存率 0/12	製 法	胎 土	焼 成	備 考
				器高	口径	底径	最大径					
152	1517	A-F-2	カメ A		210			1	ヨコナデ	石英細粒	不	
153	1516	A-II-2	〃		180			1	ハケメ、ナデ	〃 多		
154	1513	B-F-10	〃		200			1	ハケメ、ハケメ	石英、雲母微粒	不	
155	1511	C-J-14	〃		260			1	ヨコナデ	石英粗粒多	〃	
156	1512	C-K-11	〃		180			1	〃	石英細粒多	〃	
157	1510	B-J-10	〃		200			1	〃	石英粗粒		
158	1509	B-J-10	〃		200			1	〃	〃		
159	1560	B-J-10	〃		160			4	ハケメ タタキ、ハケメ	〃	良	
160	1561	B-J-10	〃		140			1	ナデ、ハケメ	〃	〃	
161	1533	B-J-10	〃				20	4	タタキ、同心円	〃		
162	1563	A-D-2	〃						ハケメ タタキ、ナデ	石英、雲母細粒		
163	1562	A-C-2	〃						ハケメ	石英粗粒	不	
164	1564	A-G-2	〃						タタキ、同心円			
165	1530	B-J-10	〃		200		210	2.5	ハケメ、ハケメ タタキ、ナデ	石英粗粒	不	
166	1519	A-F-2	〃		220			1	ヨコナデ	〃	〃	
167	1524	A-D-2	〃		220			2.5	〃	石英細粒、黒雲母	良	
168	1527	A-F-2	〃		200			1	ハケメ、ナデ	石英、雲母微粒	〃	
169	1504	C-J-11	〃		230			1	ハケメ、ナデ		不	
170	1525	A-C-1 A-C-2	〃		220			3	ヨコナデ	石英粗粒	〃	
171	1505	A-G-2	〃		200			1.7	〃	石英、長石細粒	〃	
172	1522	A-G-1	〃		240			1	ハケメ、ナデ	石英細粒	〃	
173	1503	C-J-14	〃		200			1	ヨコナデ	石英粗粒	〃	
174	1507	A-F-1	〃		180			1	〃	〃	良	
175	1575	A-F-2	〃		24			1	ハケメ、ハケメ タタキ、花文	石英細粒	〃	
176	1570	A-D-2	カメ						ヘラ調整 タタキ、クシメ	微砂粒	〃	表面スス
177	1567	A-C-2 A-D-2	〃						タタキ、同心円	石英細粒		
178	1574	A-H-2	〃						青海波、タタキ			青海波文をナデ消す
179	1568	A-D-2	〃						タタキ タタキ、平行線	石英細粒	良	
180	1573	A-F-2	〃						〃、青海波	微砂粒少	不	
181	1569	B-J-10	〃						ハケメ 同心円	石英、雲母微粒		
182	1572	A-F-2	〃						〃	石英細粒少	不	
183	1571	A-E-2	〃						〃 青海波	微砂粒少	〃	
184	1565	A-F-2	〃						〃 花文	石英、雲母細粒		
185	1566	A-F-2	〃						〃 青海波	石英細粒		
186	1534	C-K-12	カメ B	135	145	75	145	7	水挽	石英粗粒	良	平底、回転糸切
187	1556	B-J-10	〃		160			1	〃	石英、雲母微粒	不	
188	1555	C-J-14	〃		140			1	〃	石英細粒	〃	
189	1558	A-D-1	〃		120			1	〃	〃	良	
190	1559	A	〃		160			0.7	〃	石英粗粒		
191	1551	B-J-10	〃		160			1	ハケメ、ナデ	石英細粒		
192	1531	B-J-10	〃		140		153	4	ハケメ、ハケメ	石英粗粒、雲母	良	内外面共にスス付着
193	1552	B-J-10	〃		120			2	〃	〃 少	〃	頸部にスス
194	1553	A-F-12	〃		120			1	〃	〃	〃	頸部にスス
195	1557	B-J-10	〃		120			1	水挽	石英微粒少	〃	
196	1577	A-G-2	〃						ナデ	石英細粒	不	
197	1548	B-J-10	〃			80		4	ヘラ調整	〃		
198	1536	A-D-2	〃			120	220	2.5	〃	石英粗粒	不	
199	1537	C-K-11	〃		56			12		石英粗粒多	〃	静止糸切カ
200	1543	A-D-2	〃		70			12		石英、雲母細粒		廻転糸切
201	1545	A-C-2	〃		60			12	水挽	石英粗粒		廻転糸切
202	1546	B-J-10	〃		60			12	〃	石英、雲母細粒	良	〃
203	1544	A-C-1	〃		60			12	〃	石英粗粒	〃	〃

挿入 No	遺物 No	出土場所	器種	計測 (mm)				残存率 0/12	製法	胎土	焼成	備考
				器高	口径	底径	最大径					
204	1547	A-H-1	カメ B		90			4.5	水挽	石英、雲母粗粒	良	廻転糸切
205	1550	A-E-1	〃		85			4.5	〃	石英、雲母細粒多		底部二次調整
206	1549	A-F-2	〃		65			4.5	〃	〃	良	特に砂粒多い
207	1538	A-D-2	〃		70			12	〃	石英粗粒	不	
208	1539	B-J-10	〃		65			12	〃	〃	良	静止糸切カ
209	1535	C-K-11	〃	145	133	80	135	12	ヘラ調整	石英粗粒多	良	〃 平底
210	1541	A-D-2	〃		60			2	水挽	石英微粒		〃
211	1542	B-J-10	〃		75			3.5	〃	石英細粒多	不	静止糸切カ、一部擦消し
212	1540	A-I-2	〃		70			5	水挽	〃		〃
213	1611	A-F-2	ナベ		420			1.2	ナデ	石英、雲母粗粒		
214	1609	B-J-10	〃		420			0.7	クシメ、ナデ	〃	不	
215	1612	B-J-2	〃		400			0.7	ナデ、クシメ	石英、雲母細粒		
216	1603	C-J-11	〃		400			1.5	クシメ、ハケメ	石英粗粒	良	
217	1606	A-D-2	〃		400			1	〃	〃	不	内外面スス、一部炭化物
218	1602	A-D-2	〃		400			1.5	〃	石英粗粒		外面スス
219	1619	A-G-2	〃		420			1	ハケメ、ナデ	石英粗粒		
220	1620	A-D-2	〃		400			1.5	クシメ、クシメ	石英、雲母粗粒		
221	1613	B-D-2	〃		380			0.7	ナデ	石英粗粒		
222	1607	A-F-2	〃		320			1	クシメ、ハケメ	〃		外面に炭化物
223	1601	B-J-10	〃		380			5	クシメ	石英、雲母細粒		
224	1604	A-D-2	〃		420			1	ハケメ	石英粗粒	不	外、内面一部にスス付着
225	1614	A-C-2	〃		400			1	〃	〃		
226	1618	A-F-2	〃		380			1.7	クシメ、ナデ	石英細粒		
227	1616	A-F-2	〃		420			1.2	ナデ	石英粗粒多	不	黄白色
228	1617	A-A-2	〃		440			1.2	〃	石英微粒	良	外面ヘラ調整カ
229	1615	A-F-2	〃		380			1.2	ハケメ、ナデ	〃		黄白色
230	1610	B-J-10	〃		380			1	クシメ	石英粗粒	良	直立きみ
231	1608	A-D-2	〃		380			1	ハケメ、ハケメ	〃	不	
232	1605	A-H-1	〃		440			1	タタキ、青海波	石英粗粒		外面にスス
233	1628	A-D-2	〃		400			0.6	クシメ、クシメ	石英粗粒		外面スス付着
234	1627	B-I-10	〃		420			0.8	ナデ	石英、雲母細粒		
235	1626	A-F-2	〃		360			0.6	ハケメ、ナデ	石英細粒	不	
236	1624	A-D-2	〃		400			0.5	ハケメ、クシメ	石英粗粒	良	
237	1621	C-J-11	〃		400			0.7	ナデ	石英、雲母細粒	〃	外面炭化物
238	1625	A-B-2	〃		400			0.7	ハケメ、ハケメ	〃		
239	1629	A-F-2	〃		420			0.5	ナデ、クシメ	〃 粗粒		
240	1630	B-H-10	〃		380			0.7	ナデ	〃		
241	1622	B-J-10	〃		420			0.8	〃	石英粗粒多	良	
242	1623	B-I-10	〃		400			0.5	〃	砂質土多	〃	
243	1643	A-F-2	〃						タタキ、ナデ	雲母微粒	〃	内面炭化物付着
244	1641	B-J-10	〃						ハケメ、クシメ、ヘラ ケズリ	石英粗粒	〃	面取状
245	1638	C-J-13	〃						ハケメ、タタキ、ナデ	雲母細粒	〃	
246	1633	B-J-9 B-J-10	〃					2	クシメ、クシメ	石英、雲母粗粒	不	
247	1635	B-J-10	〃						タタキ、クシメ	石英粗粒	良	
248	1637	C-K-11	〃						ハケメ、タタキ	雲母微粒	〃	外面スス、内面炭化物
249	1632	C-J-14	〃					1	ハケメ、〃	石英、雲母微粒	〃	内面炭化物
250	1644	C-J-10	〃						クシメ、タタキ	〃 細粒	不	外面スス付着
251	1640	A-J-10	〃						タタキ、クシメ	石英、雲母細粒	良	
252	1636	C-J-14	〃						タタキ、ハケメ、ヘラ ケズリ	石英粗粒	〃	面取状
253	1631	B-J-10	〃					1.5	タタキ、クシメ	石英、雲母細粒	不	外面スス付着
254	1634	B-H-12	〃					2	タタキ、タタキ	石英粗粒	〃	
255	1639	A-H-2	〃						ハケメ、ヘラケズリ	石英粗粒	良	面取状
256	1642	C-J-10	〃						ハケメ	雲母微粒	〃	外面スス付着
257	1001	A-H-2	坏	50	170	70		2	ミガキ		〃	

挿入 No	遺物 No	出土場所	器種	計測 (mm)				残存率 0/12	製法	胎土	焼成	備考	
				器高	口径	底径	最大径						
258	1007	A-C-2	坏			60		4	糸切、ミガキ		良	磨耗	
259	1010	A-D-2	〃			64		1	〃		〃		
260	1013	A-E-1	〃			68		6	〃	石英、雲母微粒	〃	内黒	
261	1006	A-E-2	〃	43	138	58		8	〃	細粒	不	砂粒がぬけ、アバタ状	
262	1022	A-H-2	〃			64		2	ミガキ	密	良		
263	1020	B-J-10	〃			60		2	糸切	石英細粒	〃		
264	1016	A-F-2	〃			64		3		砂質	不	磨耗激しい	
265	1004	A-I-2	〃	34	130	49		6	糸切	密	良	墨痕	
266	1005	A-I-2	〃	36	130	48		4	〃	石英、雲母細粒	〃	磨耗	
267	1003	A-I-2	〃	35	124	64		8	静止糸切	石英粗粒	〃	〃	
268	1008	A-H-2	〃	37	132	68		2	糸切	雲母微粒	〃	〃	
269	1002	B-K-10	〃	35	130	60		6	〃	ミガキ	〃	墨書(大)	
270	1012	A-H-2	〃			54		3	〃	石英、雲母微粒	良		
271	1023	A-H-2	〃			60		1.5	〃	ミガキ	不	磨耗	
272	1009	A-H-2	〃			54		2	〃	密	良	底部再調整	
273	1015	A-H-2	〃			60		3	〃	石英、長石、雲母少	〃		
274	1019	A-F-2	〃			60		3	〃	石英粗粒	〃		
275	1018	A-H-1	〃			60		2	〃	石英微粒	〃		
276	1021	B-J-10	〃			62		3	〃	ミガキ	密	〃	
277	1030	A-H-2	〃			60		1	〃	〃	不		
278	1014	A-E-1	〃			54		2	〃	石英、雲母微粒	〃		
279	1017	A-H-2	〃			67		4	〃	石英細粒	良		
280	1028	A-H-2	〃			70		2	〃	雲母微粒	不		
281	1011	A-H-1	〃			67		3	〃	ミガキ	砂質	良	アバタ
282	1025	A-F-2	〃	1		64		3	〃	〃	雲母微粒	〃	
283	1027	A-I-2	〃			60		2	〃	ミガキ	〃		
284	1024	A-H-2	〃			60		2	〃	〃	石英、雲母微粒	〃	
285	1029	A-F-2	〃			58		2	〃	砂質	〃		
286	1031	B-E-9	〃			60		8	〃	雲母、長石細粒	不		
287	1032	A-E-2	〃			54		4	ナデ	〃	〃	内黒ウルシ	

その他の土器・陶器・一覧表

挿入 No	遺物 No	出土場所	器種	計測 (mm)				残存率 0/12	製法	胎土	焼成	備考
				器高	口径	底径	最大径					
288	1201	A-F-2	陶 鉢	(45)	4		13	12		雲母、長石微粒	良	管状
289	1202	A-F-2	〃	(40)	4		12	12		雲母、石英微粒	〃	〃
290	1203	A-F-2	〃	(39)	3.5		12	12		〃	不	〃
291	1204	A-F-2	〃	(24)	2.5		9	12		石英微粒	良	〃
292	1205	A	〃	(30)	2.5		9	12		〃	不	〃
293	1206	20トレンチ	〃	(40)	2.5		9	11			良	〃
294	1207	A-G-2	土製品				38	6		石英微粒	不	
295	1209	B	石 鉢									
296	羽-1	A	羽 11		23		54					
297	羽-2	A	〃		22		50					
298	G-1	A-H-1 A-E-1	カ メ									弥生土器 } 同一 } 個体カ
299	G-2	A-F-2	〃								〃	
300	G-4	A-B-2	〃								〃	
301	G-3	A-F-2	〃								〃	
302	1208	20トレンチ				(70)					良	〃 高坏脚部
303	M 1	C-K-11	鉢		306			1	オロシ目なし	密	不	中世陶器
304	M 2	C-K-13	壺		308				内ナデ、タタキ	石英、黒雲母微粒	良	〃

木製品一覧表

挿図 No	遺物 No	出土場所	種別	計測 (mm)			製法	材質	備考
				巾	長さ	太さ			
1	1	A-G-2	杭カ	30	120	26	割りケズリ	イタヤカ	
2	2	C-J-12	〃	24	155	13	〃	〃	
3	3	C-J-12	板片	39	135	8		杉	板破片
4	4	A-I-1	〃	13	190	5		〃	〃
5	5	A-G-2	杭カ	50	365	37	割り	栗カ	先端突らす
6	6	A-I-2	割材	103	455	50	〃	杉	両端磨耗、木面も残る
7	7	A-G-2	杭カ	60	462	40	〃	栗カ	先端突らす
8	8		〃	80	1030	40	〃 半裁		〃

種子類他一覧表

挿図 No	遺物 No	出土場所	種別	数量	備考
1	N1	B-C-10 B-D-10	エゴの木	9	種子
2	N2	A-I-1 A-I-2	〃	53	〃
3	N3	A-I-2	〃	1	〃 外皮を有する
4	N4	A-I-2	〃	14	〃
5	N5	A-H-1	〃	12	〃
6	N6	A-H-1	トチの木	1	内果皮
7	N7	A-H-1	オニグルミ	1	果実
8	N8	A-H-2	〃	1	〃
9	N9	A-G-2	〃	1	〃 (No24平面図)
10	N10	A-G-2	凝固物		
11	N11	A-H-2	〃		図版23
12	N12	A-E-1	〃		
13	N13	A-H-2	鉄滓		図版23

## IV ま と め

### 1 出土遺物について

出土遺物は須恵器と土師器である。前章でこれらの形態に関して記述したが、ここではその数量による比率などにふれておこう。須恵器・土師器共に個体数の把握は難題であるが、破片数及び重量からの算出を試みた。破片数における個体数の割出しは底部片、あるいは口縁片による実個体数と総破片数との2通りを算出してみた。

表1の須恵器、表2の土師器共、口縁部における個体識別と坏類における底部による個体識別によって個体数を数えた。なおついでながら総破片数をも求めたが意味を成さない様であった。

一方重量による個体数の算出は次の様である。

$$\text{総重量} \div \text{平均個体重量} = \text{個体数}$$

$$\text{須恵器 坏 } 7,540 \text{ g} \div 150 \text{ g} = 50.2$$

$$\text{土師器 坏 } 2,725 \text{ g} \div 155 \text{ g} = 17.5$$

となり、底部破片数による数値の須恵器242個体、土師器207個体と懸け離れた数値が出て意味を成さないことが分かった。ここでは器種によって異なるが口縁部或いは底部片の個体識別による個体数がより実数に近いものであることが分かった。

以上の結果、須恵器では坏が大多数を占め、土師器では甕が坏を大きく上廻る結果が出た。須恵器と土師器に見る比率は次の如くである。

出土遺物の殆んどが、坏類を主体とする供膳具と埴、甕を主とする煮沸・貯蔵用具である。供膳具のうち須恵器碗は量的には15点に過ぎず、須恵器の供膳具は55.4%となる。一方甕の多くが煮沸に使用されるが、埴を加えた煮沸・貯蔵用具は98.6%となる。須恵器と土師器が有する材質の特徴

表1 須恵器 破片数による個体識別

	壺	瓶	坏	蓋	碗	計
口縁又は底部による個体数	6 2%	11 3.7%	242 82.3%	20 6.8%	15 5.1%	294
総破片数	26 4.4%	15 2.5%	507 85.6%	27 4.6%	17 2.9%	592

表2 土師器 破片数による個体識別

	甕 A	甕 B	埴	坏	計
口縁又は底部による個体数	316 50%	67 10.6%	42 6.6%	207 32.8%	632
総破片数	2,742 80.7%		94 2.8%	560 16.5%	3,396



表3 須恵器・土師器の比率 (%)

	坏	碗	埴	壺・甕	総個体数	総破片数
須 恵 器	53.9	100	0	1.5	31.7	1.5
土 師 器	46.1	0	100	98.5	68.3	98.5

から用途の相違が見られるところであり、特に煮沸用具に土師器・土師質用器を使用することなどが知られている所である。しかしながら出土遺物の須恵器と土師器の割合が、その破片数或いは個体数から見ても圧倒的に土師器が多い。このことはこの遺跡の営まれた時期に係るものであろう。

出土遺物から見る遺跡の時期はいつ頃であったのであろうか。須恵器のうち、一部の坏や坏蓋、また瓶、壺に見られる細部の特徴や土師器の坏類、甕B類に見る特徴などから8世紀後半に位置づけるものである。そしてまた土師器の比率の多さはいますこし年代を降ろす必要もありえる。

土師器甕B類の一部と坏に見られたロクロ切り離し痕が、静止糸切法と呼ばれる柁目状の痕跡を持つものがある。私共にとってはこの時期では初見のものである。土師器に見る静止糸切りの出現時期を知り得ないが、或いはこの遺跡の下限がかなり降りるものなのであろうか。なお今後の課題としたい。そしてこの遺跡の営みは前述の8世紀後半を中心にして、その前後即ち8世紀後半から9世紀中葉に及ぶものと考えたい。

当遺跡より出土した須恵器類の生産窯は、新津丘陵を中心とする七本松窯址群の製品と考えられる。七本松窯址群は今のところ10基前後の窯址群だが、この地域の消費に对应得る。また越後最大規模と推定される阿賀北の五頭山麓窯址群の製品とは、肉眼で見える限り胎土が異なる。一方土師器の生産窯は確認されていないが、おそらく七本松窯址群の背後における未確認窯によるものと考えておきたい。

## 2 おわりに

当発掘調査においてその調査区域内に遺跡の本体を見ることが出来なかった。発掘地点の殆んどは湿地帯か大河の氾濫源で、おそらく人間の寄りつける地帯ではなかったと考えられる程の軟弱地盤であった。従ってこの様な泥沼での調査作業は初めての体験でもあった。現在の川口地区は能代川の自然堤防上に発展した帯状に連なる集落である。当遺跡の本体もまたこの自然堤防上に存在したことは言うまでもない。そしてその位置は僅かに東南寄り、或いは東北寄りに所在したものであろうことは容易に察することが出来る。検出された多くの遺物は大河の氾濫等によって押し出され、よどみに堆積したものであろう。時代を異にする遺物もまた同様のことである。特に中世陶器は北東側に隣接する「川口集落遺跡」からの流出物であることが考えられるところである。

最近まで遺跡数が多いとは言えなかった新津市に近年多くの遺跡が発見され、その多くは平野部におけるものが多い。そしてその多くは当遺跡と同時代の8～10世紀における集落址である。それらの数ヶ所が磐越自動車道建設のため、一昨年より発掘調査が進められている。それらの遺跡との関連を今後の課題としたい。

年度内での報告書発刊の制約があり、それらを果し得ない。限られた時間の中でのつたない報告書が何等かの役にたち、市民の皆様にも少しでも夢を与えることが出来れば幸いである。現地調査から本書発刊に至るまで、物心両面でお世話下された多くの方々に謝意をのべるものである。

1992. 3

## 参 考 文 献

- 新津市史編さん委員会 1989 『新津市史』資料編第1巻 新津市  
中川成夫ほか 1956 『新津市田家七本松須恵器窯址発掘調査報告書』 北方文化博物館  
坂井秀弥ほか 1984 『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』 新潟県教育委員会  
鈴木俊成ほか 1988 『小出越遺跡』 新潟県教育委員会  
拙著 1982 『平遺跡』 新津市教育委員会  
拙著 1991 『発久遺跡』 笹神村教育委員会



遺跡遠景



同近景



A区



B区



C区



B・C区水抜き

発掘調査前



A 区



B 区



B・C 区

作業スナップ





B 区北侧



B 区北侧



C 区东侧



C 区东侧

土 層



西側より



東側より



川状遺構



西側より



中心部



東端





北側より



CK-12窪み



CK-15窪み

C区完掘



AH-2区 No 102-51



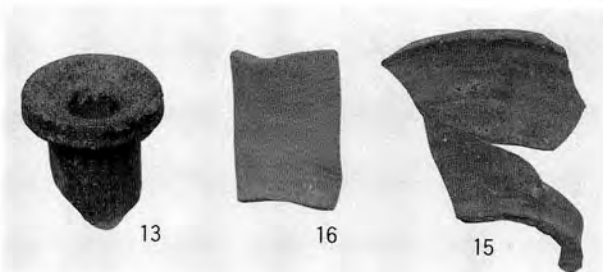
BH-10区 No 105-45



AF-2区



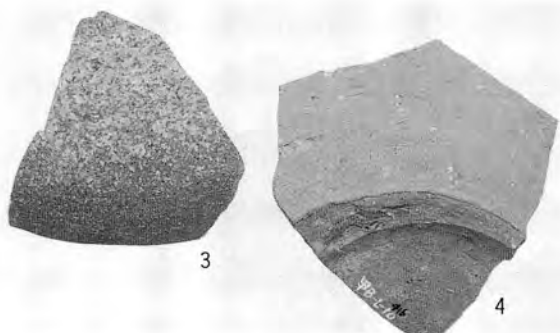
1



13

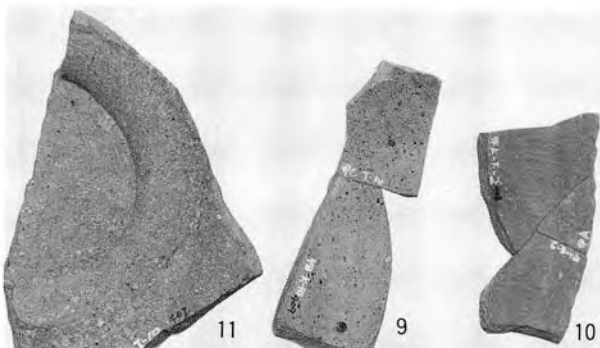
16

15



3

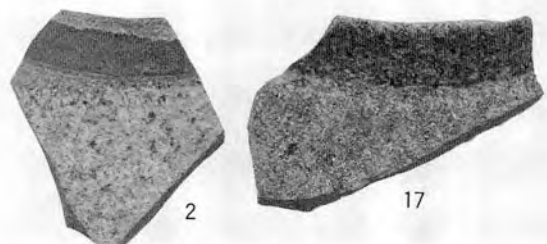
4



11

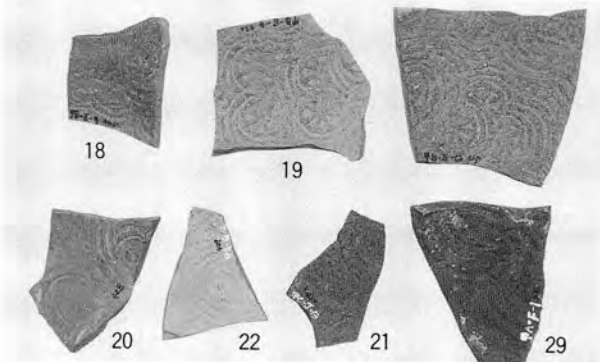
9

10



2

17



18

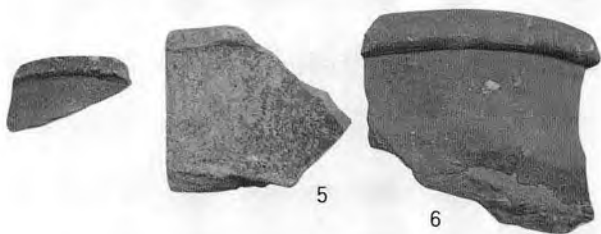
19

20

22

21

29

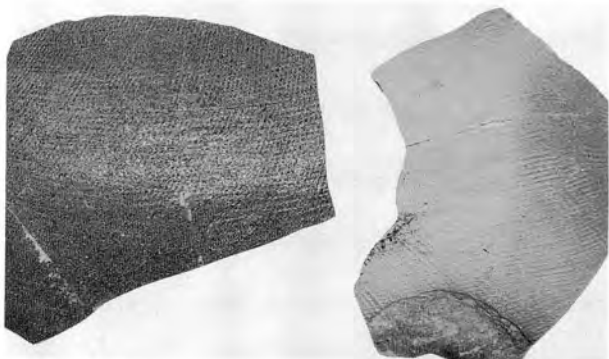


5

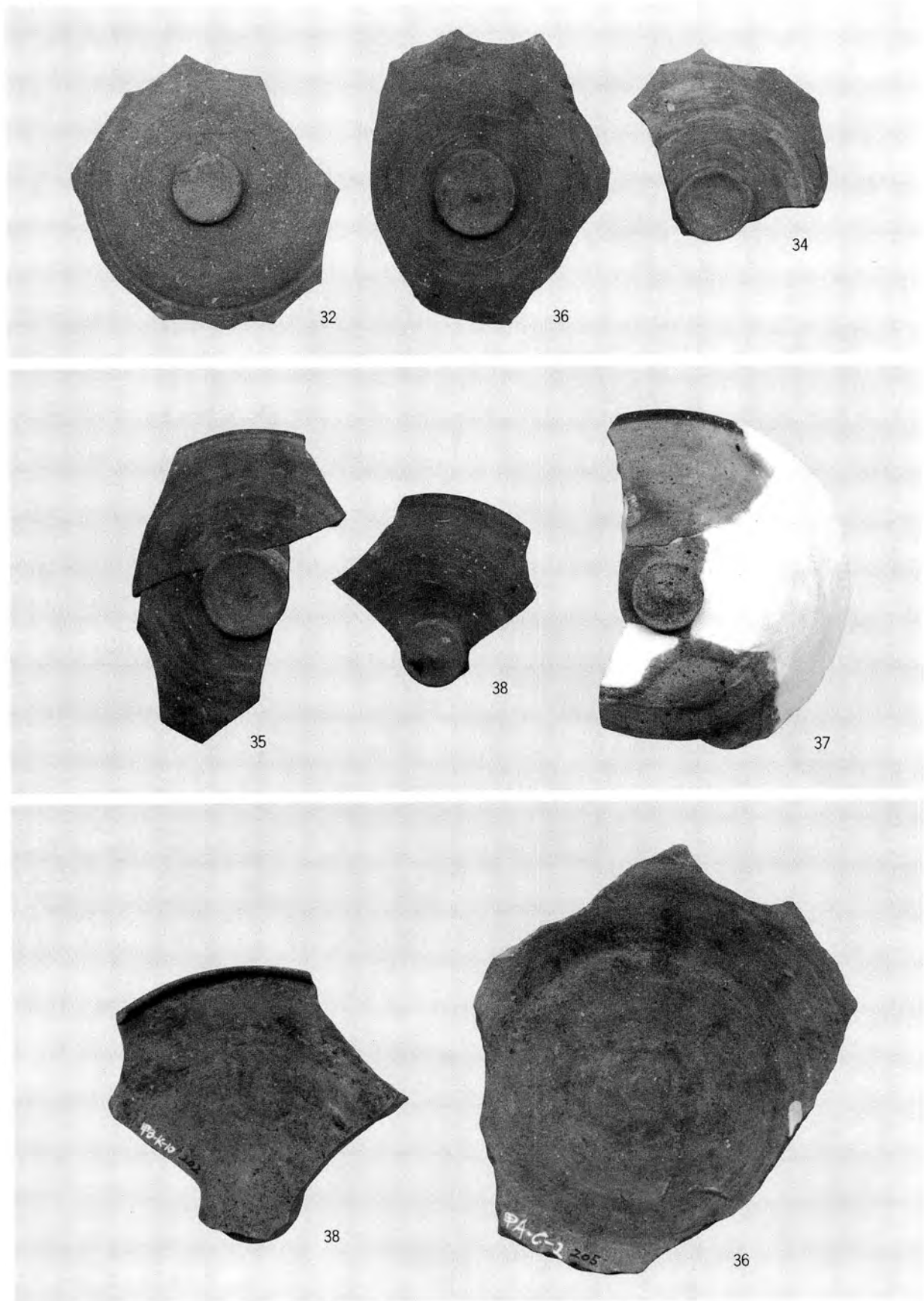
6



14

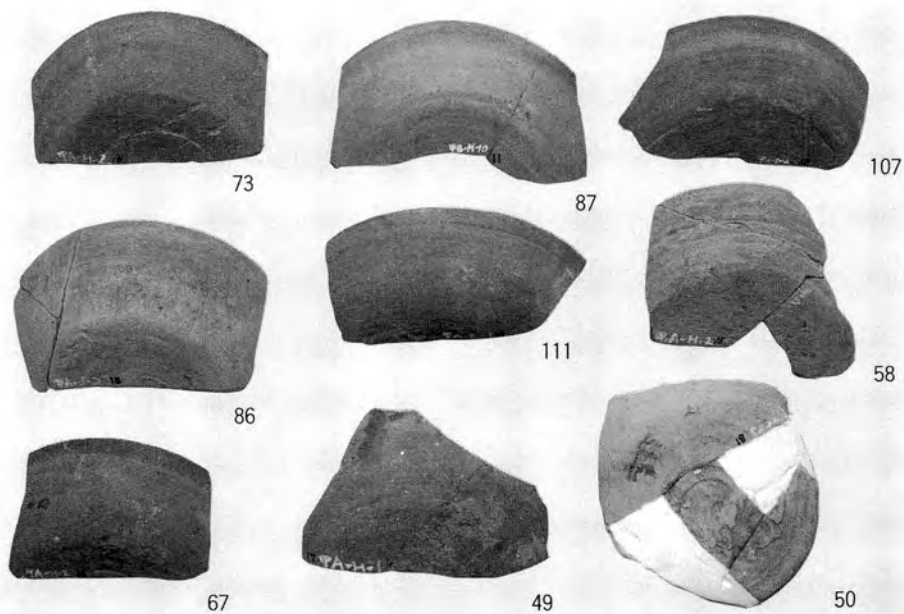
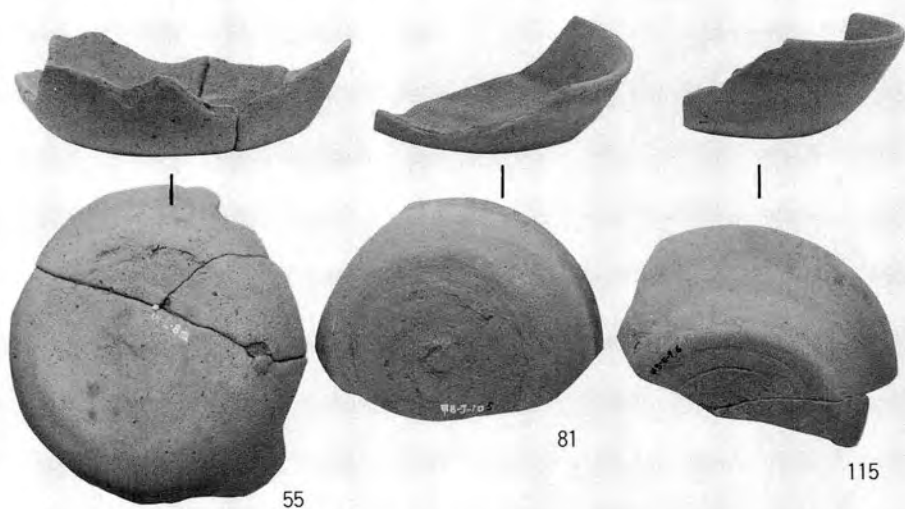
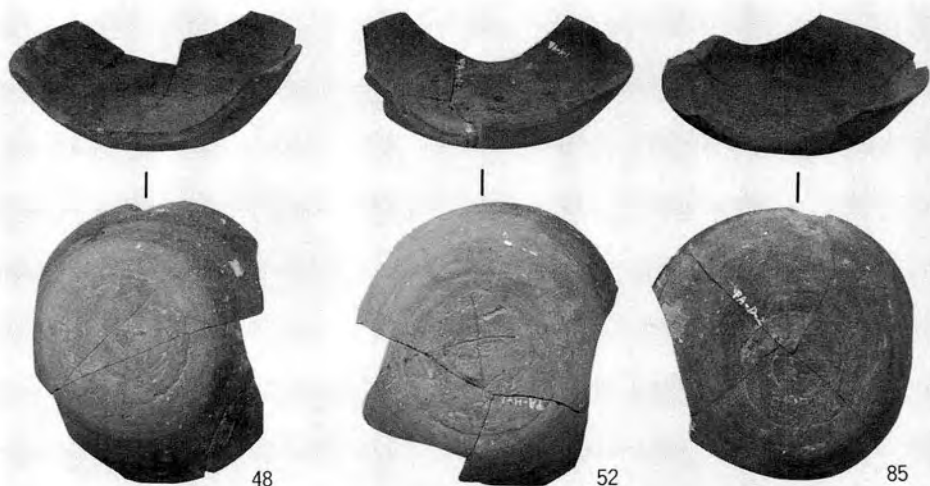


出土遺物 須恵器、壺類

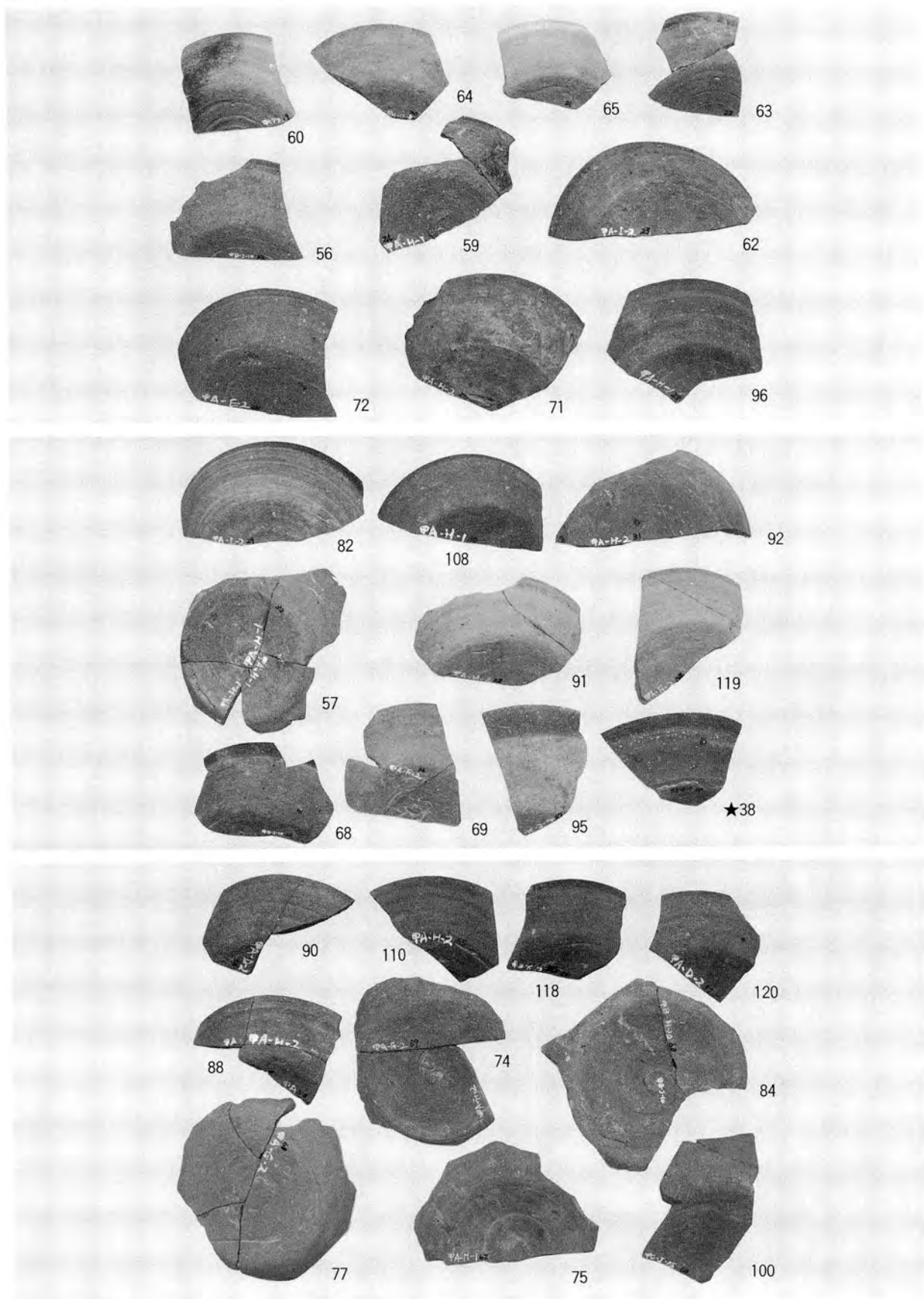


出土遺物 須恵器、坏、蓋（下は転用碗）

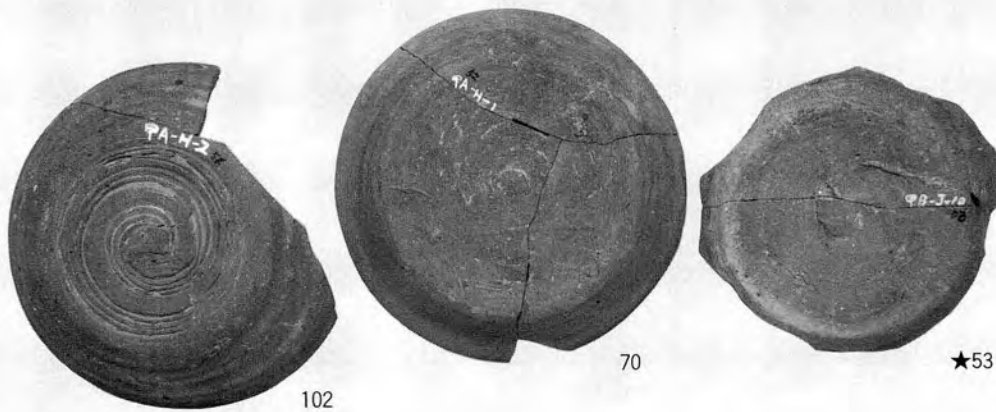
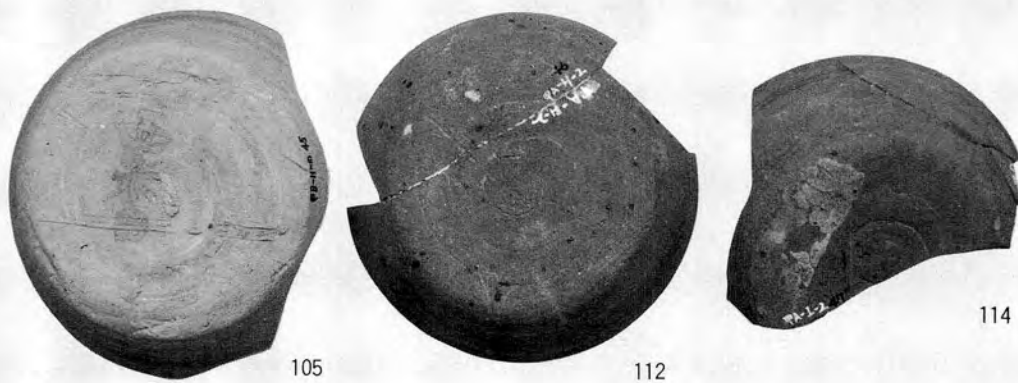
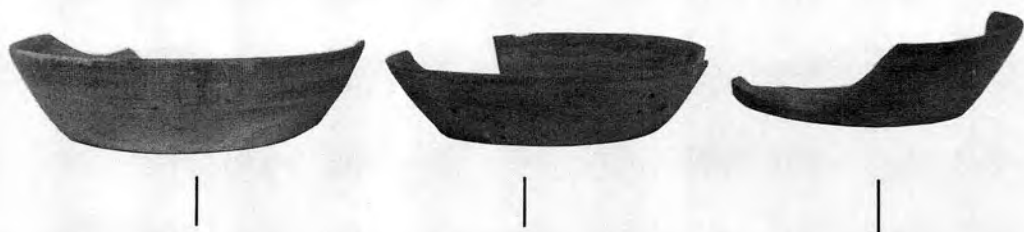
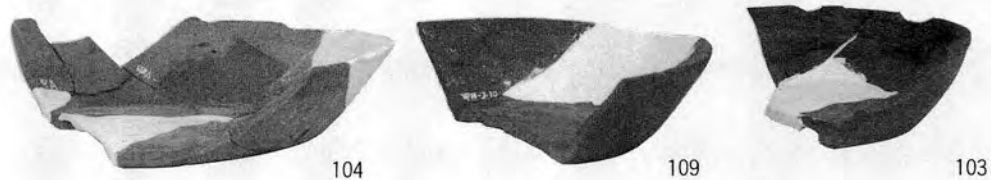




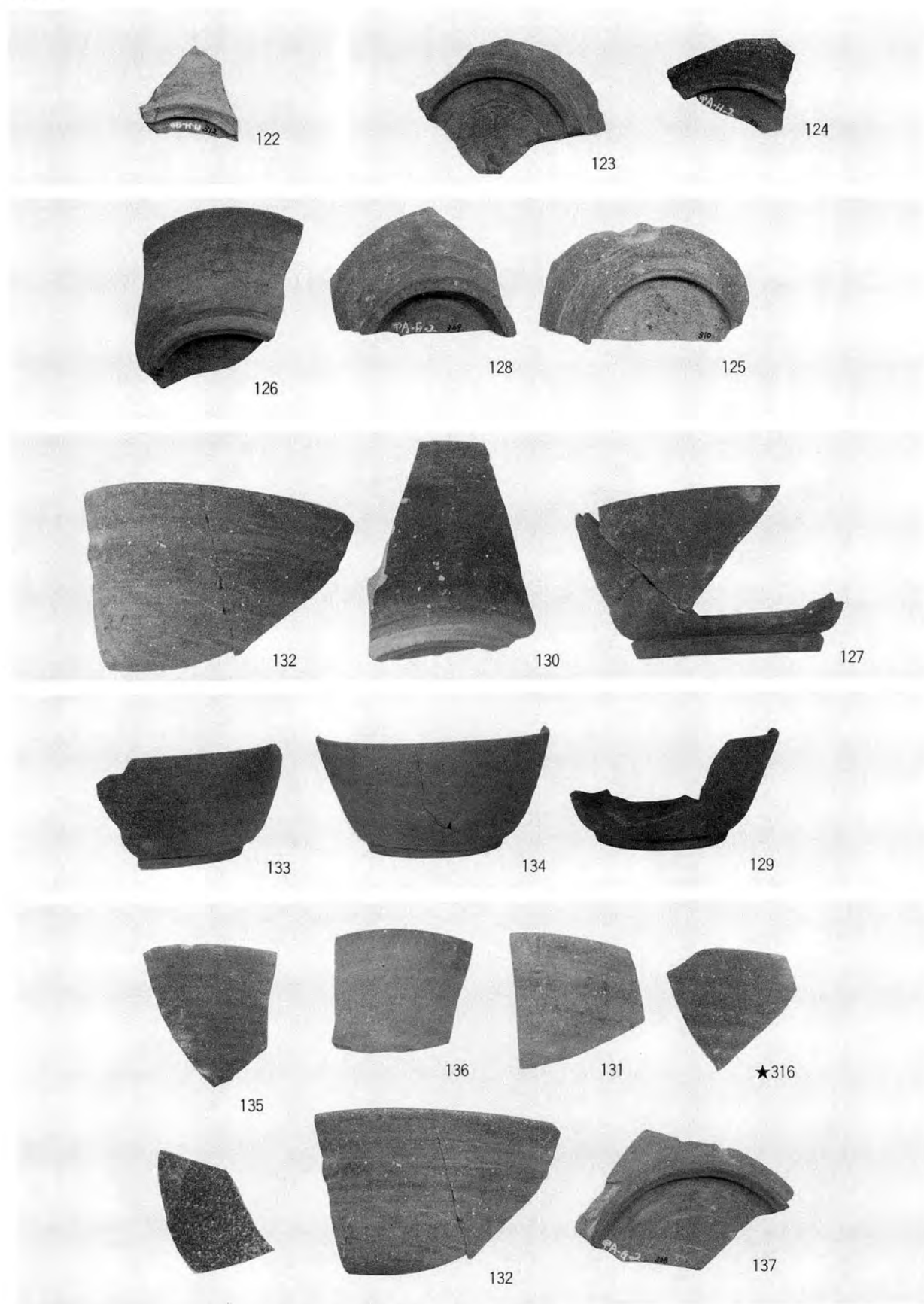
出土遺物 須恵器、坏



出土遺物 須恵器、坏

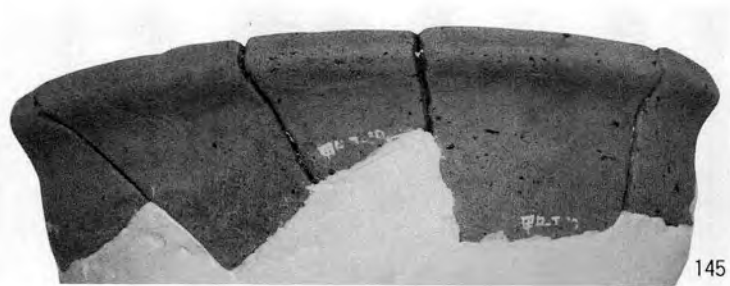


出土遺物 須惠器、坏

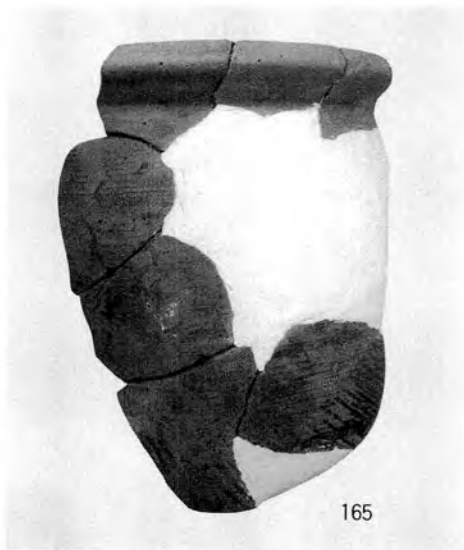


出土遺物 須恵器、坏、碗

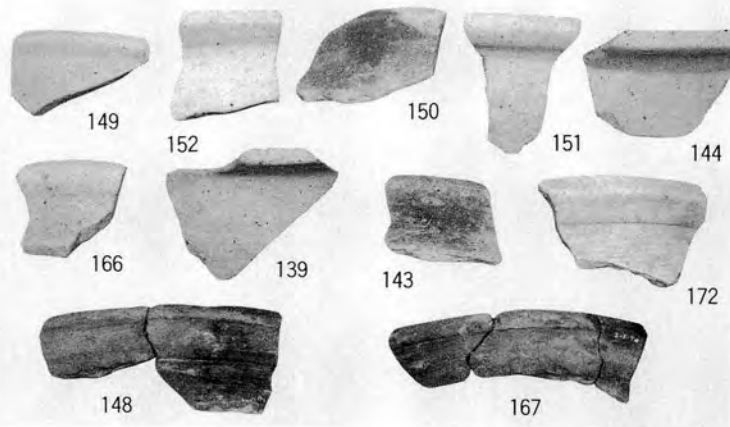




145



165



149

152

150

151

144

166

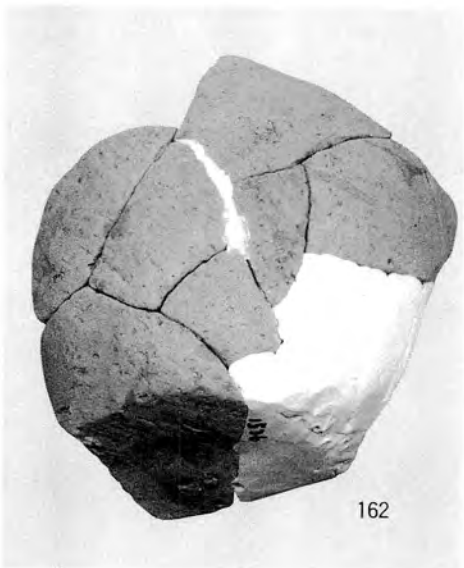
139

143

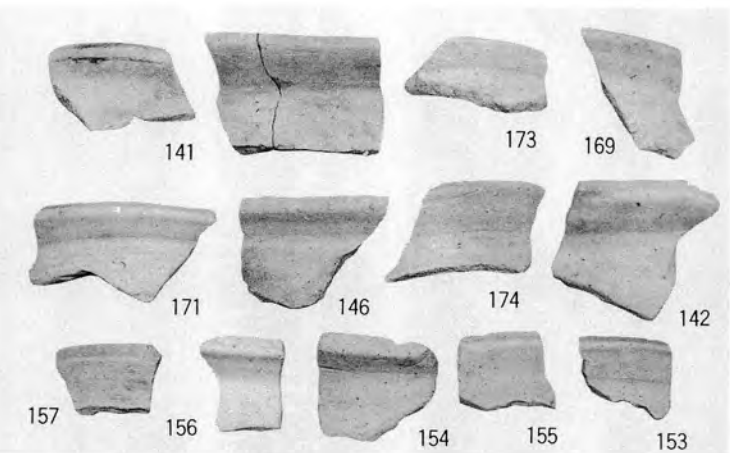
172

148

167



162



141

173

169

171

146

174

142

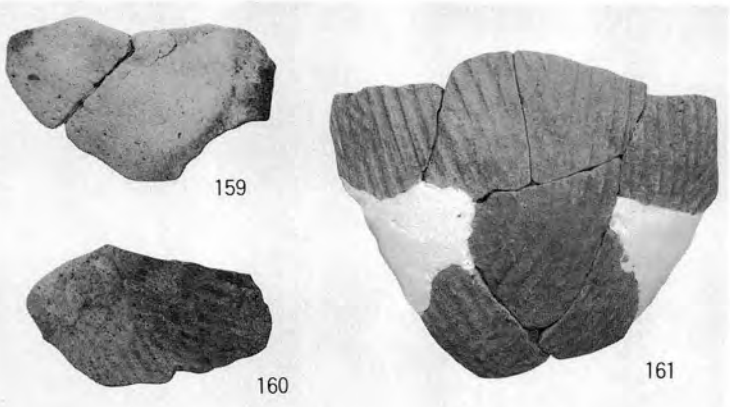
157

156

154

155

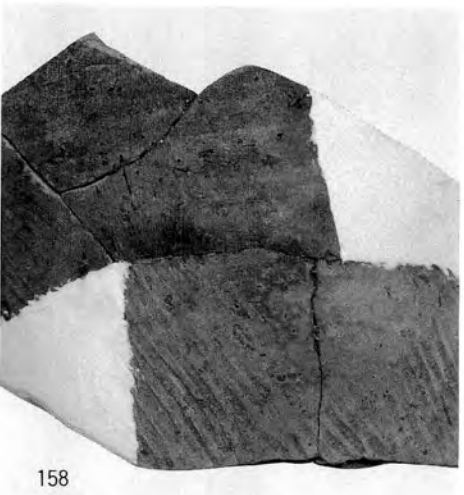
153



159

160

161



158

出土遺物 土師器、カメ A



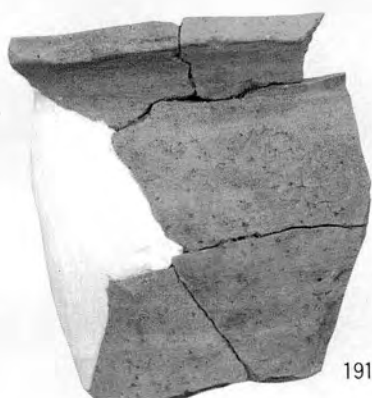
186



209



199



191



192



193



196



194



195



188



187



198



189



190



201



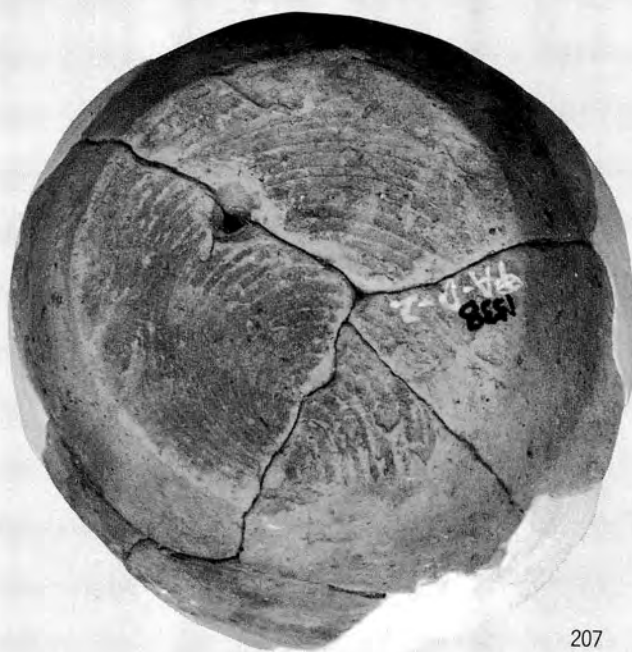
202



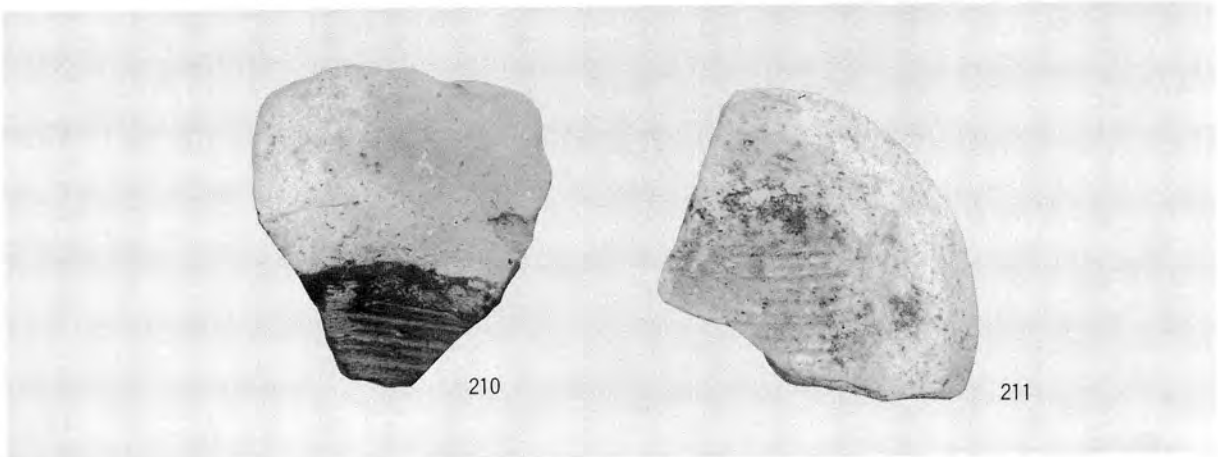
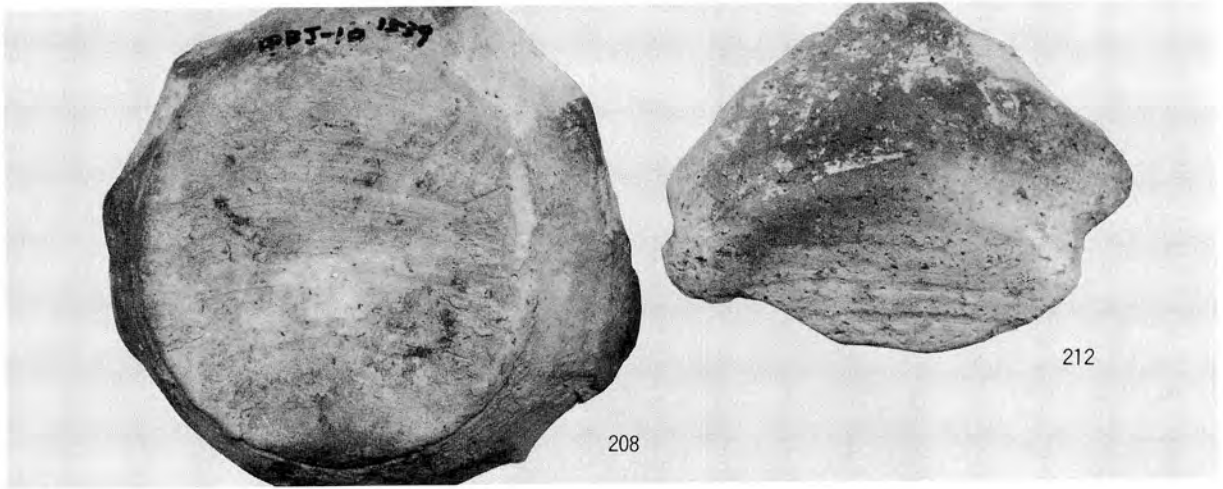
200



203



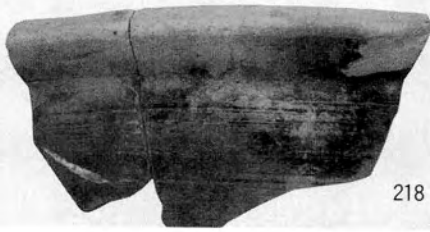
207



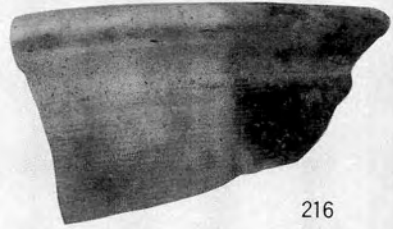
出土遺物 土師器、カメ B (静止糸切)



223



218



216



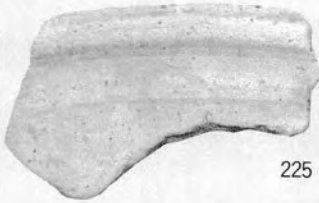
213



215



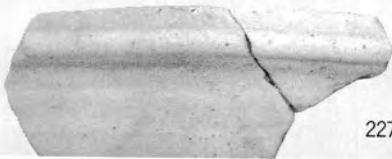
221



225



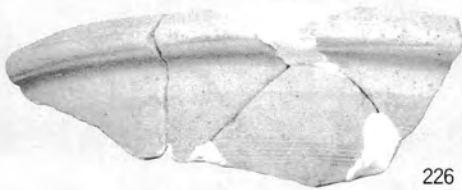
229



227



228



226



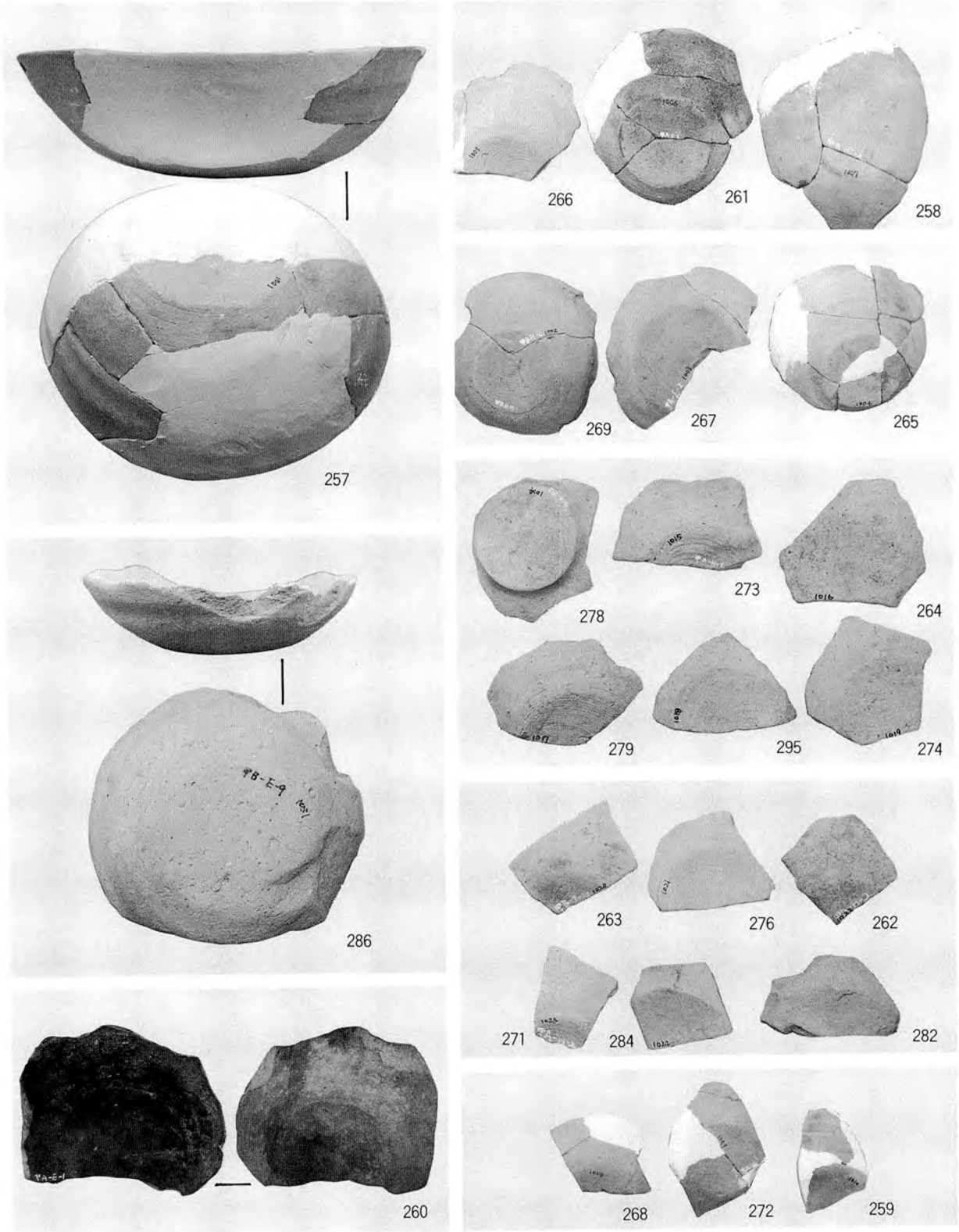
219



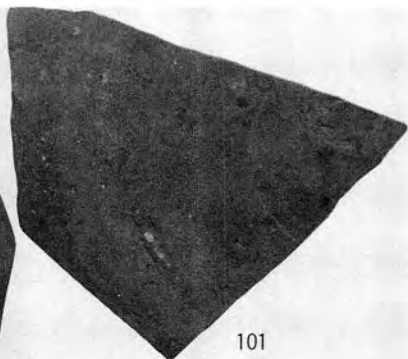
220

出土遺物 土師器、埴

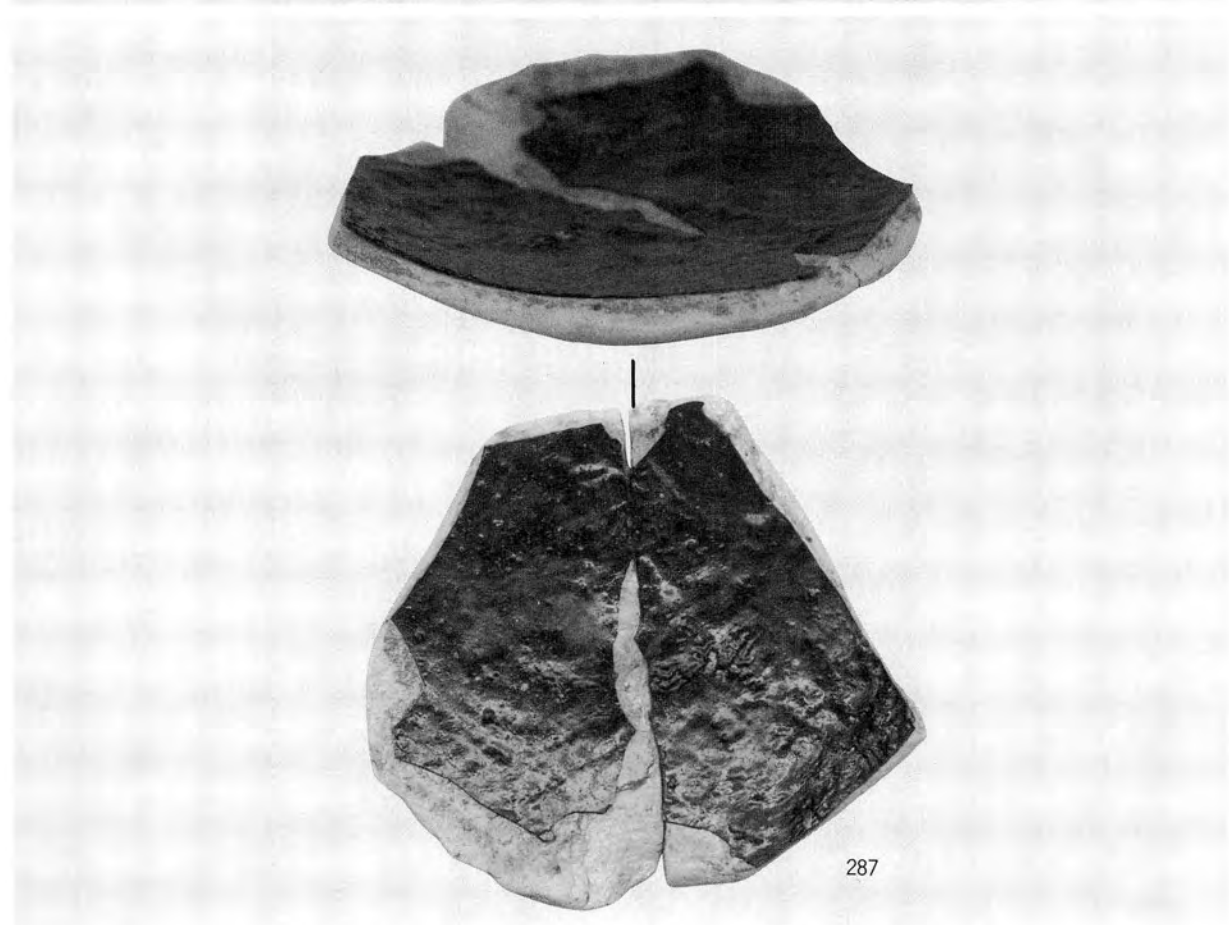
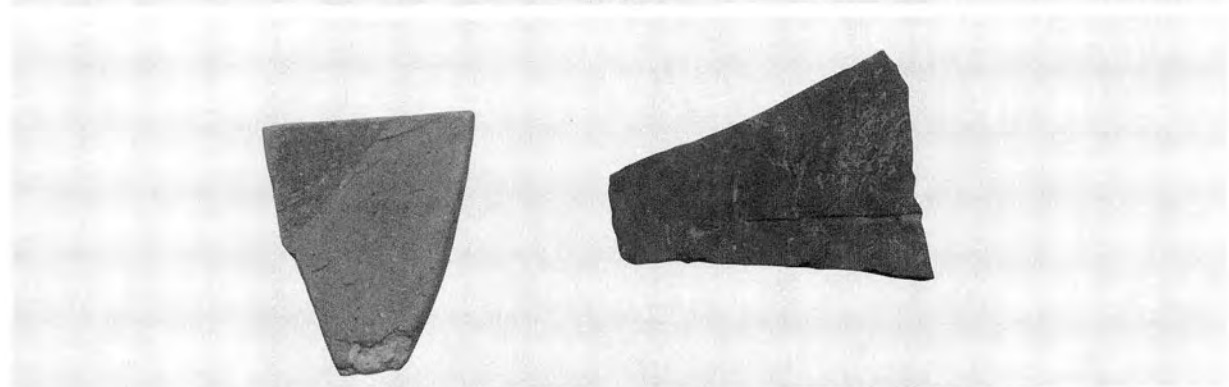
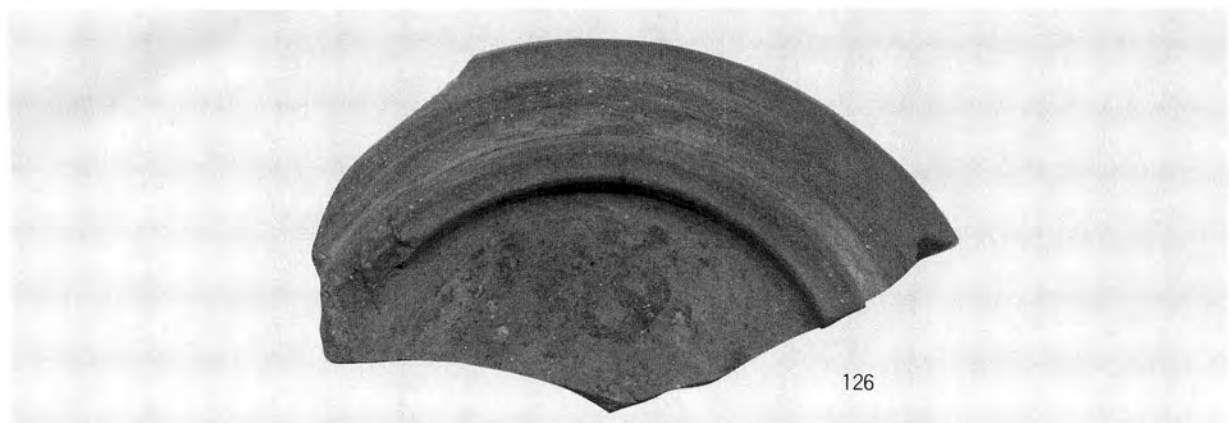




出土遺物 土師器、坏

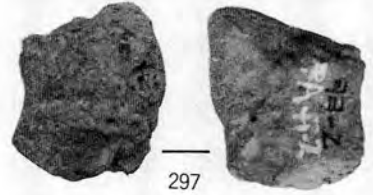


出土遺物 須惠器、墨書土器



出土遺物 上 須恵器 墨書土器 下 土師器 施漆土器





出土遺物 土製品、木製品、種子、その他

## 川口甲遺跡発掘調査報告書

平成4年3月21日印刷

平成4年3月31日発行

発行 新潟県新津市教育委員会  
新潟県新津市程島2009番地  
TEL (0250)22-9667

印刷 長谷川印刷  
新潟市小針1丁目11番8号  
TEL (025)233-0321